再訂明ム讀本

芳賀矢一編

4a
810
明43

41679

教科書文庫

4
810
41-1910
20000
71950

東京帝國大學圖書之印
貴重書
大學圖書館藏

資料室
42
810
明43

明治四十三年一月二十六日
文部省檢定濟
中學校國語科用

文學博士 芳賀矢一編

再訂 明治讀本

東京 合資會社 冨山房發兌

広島大学
教
71930
図書

目次

再訂 明治讀本 卷三目次

一 扇の的(韻文)……一
二 頭上の林檎(一)(口語文)……六
三 頭上の林檎(二)(同)……一三
四 三尺の庭(口語文)……高濱虛子……一七
五 太陽の大きさ……二〇
六 ニュートンの失策(口語文)……和田萬吉……二三
七 バクテリヤ……國定讀本……二四
八 硝子……三〇
九 螢(口語文)……渡瀨庄三郎……三九
一〇 外國航路……四五

一一 船に殉したる船長……大町桂月…五〇
一二 小笠原島だより(書翰文)……田口卯吉…五三
一三 ジヤバ旅行……神保小虎…五七
一四 馬……六六
一五 熊本守城概記……谷干城…六九
一六 祇園の夜鬼……七五
一七 京都御所拜觀の記……七六
一八 朝鮮京城……坪谷水哉…八二
一九 僕の寫眞帖(口語文)……八九
二〇 星と花(韻文)……土井晚翠…九六
二一 八汐の花……德富健次郎…九七
二二 弦月旗……落合直文…一〇〇

二三 人間の三種三等……福澤諭吉…一〇九
二四 福澤諭吉……國定讀本…一一四
二五 淺間山に登る記……大町桂月…一一九
二六 英國富强の原因……一二九
二七 外國語を知るの必要(書翰文)…塚越芳太郎…一三二
二八 英人は如何なる國民か……一三八
二九 兒童に訓す……萩野由之…一四二
三〇 豐太閤……三上參次…一四六

卷三目次終

弓手

さゞめく

再訂

明治讀本　卷三

一　扇の的

與一は馬をうちよせて、弓手（ゆんで）の沖を見渡せば、御座の御船や女官の船、屋形屋形の前うしろ、御簾几帳（キ）もさゞめけり。

馬手

鳴りを靜めて

弓取

馬手の沖には楯甲、
兵船數百漕ぎ竝べ、
鳴りを靜めて平家の一門、
陸にはもとより源氏の勢、
大將義經を始とし、
阪東の弓取數千騎、
今日を晴とぞ眺めける。

所は海も遠淺の、

氣を凝らす

冥加

一段ばかり乘り出でしが、
與一が馬は沛艾の、
潮に狂へる折こそあれ、
夕西風の吹き立ちて、
船の的さへ定まらず。

與一は眼を閉ぢ、氣を凝らし、
「南無八幡大小神祇、
別して下野那須の明神、
弓矢の冥加あるべくば、

扇の的を鎭めたまへ。
源氏の武運極まりて、
家の果報も盡くべくば、
我をば海に沈めたまへ。」と、
祈念を終り目を開けば、
扇は座にど鎭まりける。

あな

拔き取る鏑矢は十二束、
弓に番ひて引き固め、
みやる的はあなおそろし、

天津日影の御形なり。
要の程をと志し、
兵と放つ矢心地よく、
かつちと答へて要は船、
扇は空にひらめきて、
海へさつとぞ入りにける。

兵と放つ

平家の勢は舷を打ち、
源氏は箙、鞍の前輪、
一度に叩き聲々に、

喝采

射たりや射たりと喝采す。

元暦元年彌生の末、
西日落つる壇の浦、
那須の與一宗高が、
譽ぞ今に殘りける。

二　頭上の林檎(一)

アルトドーフの郊外では、管領ゲッスレルの兜を竿に懸けて、二人の番兵がそれを守つてゐる。道行く市民はそれに禮をして行かねばならぬ。市民はあまり

人影もみぬ
餘念なく
不敵もの

の事に皆まはり路をして通るので、昨日までは繁華であつた往來も、今日は人影を見ぬばかりである。テルは一子ワルテルをつれて、餘念なく物語して、そこを通りかゝると、番兵は槍を突きだして、「待てッ。」と大喝した。テルは始めて氣がつき、「私は何も存ぜぬ獵師でござります。何卒お通しを。」といふを耳にもかけず、「お上の命令に叛く不敵もの。さあ牢舍に來れ。」と引つ立てようとした。ワルテルは驚いて泣く。近所の者共は大勢駈け來り、樣々にわびてやつたが、聽かぬので、尚言ひ爭つてゐると、折惡しく彼方に角笛の音がし

仔細を申せ

存意

粗忽

頑是なく

て、「管領様のお通り。」と報じた。

ゲッスレルは、この時遊獵の歸と覺しく、弓、長槍など携へた夥多の家來を從へて、こゝに來かゝり、「何事ぢや、仔細を申せ。」と叱りつけた。番兵は恐るゝ、その次第をいふと、ゲッスレルはうなづき、「テル、その方は、身共がこの兜を掛けおく存意を承知であらうな。」テル「何卒お赦し下さいませ。思はず粗忽致しましてござります。」管領「いやテル、その方は弓矢の名人と聞き及ぶが。」といへば、ワルテルは何の頑是なく、「本當でございます。父様は五十間もある所から、樹の上の林檎を

命中

ひれふし

射ておとします。」といふ。ゲッスレルはテルに向ひ、「それなるは其方の忰か。」「左様にござります。」「テル、其方は五十間の遠きより樹上の林檎を射落すと申すが、此兒童の頭上に林檎を置き、この場に於て射中てゝ見せよ。見事命中したら、今日の罪を赦してくれるぞ。どうぢや。」

テルを始め一同はつと驚いたが、テルは地上に身をひれふし、「その儀ばかりは、どうぞお許を願ひまする。貴方様にもお子達はござりませう。どうして我子の頭に、矢が向けられませう。」と歎いたが、管領は色をも

動かさず、「其方は日頃奇行を好む男と聞いたのに、今日に限つて何驚くぞ。奇人と聞いて相應の役を命ずるのぢや。」と言ひ放つ。居合せたる者共も、管領の從者も、かはるゞ〳〵テルの爲に免を請うたが、ゲッスレルは少しもきかず、「さあ林檎はこゝにある。そこを明けて小童を立たせろ。距離は三十間に致してつかはす。さあ早く。」とせき立てた。

せき立てる

テルの舅のフュールストは前に進み、「恐ながら、この爺奴の地所家屋を盡くお取り上げ下されましても怨みませぬ。そのかはり今日の御命令は御赦し下さ

れますやう。」と頭を地にすりつけて歎願すると、ワルテルは、「いや祖父様、そんな惡い人にお詫をすることは無い。さあ私はこゝに立つてゐよう。父様は名人ぢや。何の私に傷をつけるものか。」と少しも恐れぬので、聞く者は尙いぢらしく、如何に鬼の様な管領でも、これには心を動かしさうなものと、一同ゲッスレルの顏を見たが、ゲッスレルはあざ笑ひ、「小童を動かぬ樣に樹に縛りつけよ。」と下知すれば、「嫌だ〳〵。」縛られずとも、小羊の樣にぢつとしてゐる。無理に縛ると、曲つたり、あばれたりしてやる。」「然らば、せめて眼だけでも

頭を地にすりつけて

いぢらし

腕を見せる

鼻をあかせる

隱すがよからう。」と從者がいふと、「眼隱も嫌だ。私はちつとも怖くはない。父樣早く腕を見せておやりなさい。早く惡い人に鼻をあかせておやりなさい。」と自ら走つて樹の下に行き。林檎を頭に載せて、待つてゐる。

三　頭上の林檎(二)

歯がみをなす

市民は歯がみをなして、管領の殘忍非道を怒つたが、管領の前後左右には、夥多の從者、槍の鋒尖を林の如くに立て、或は弓箭大太刀を横たへて、すき間なく守護してゐるので、指一本さすことも出來ず、あはれワ

嵐の前の燈火

ルテルの命は、嵐の前の燈火よりも危いことであつた。

をのゝく

ゲツスレルの「早く〳〵」と促すので、テルも今はせん方なく、をのゝく兩手に弓矢を取つて、暫くねらひをつけたが、カラリト弓矢を地に落し、はら〳〵と涙を流し、「とても私には射られませぬ。はやこの身を存分にして下されませ。」といふ。ゲツスレルは尙も「いやいやこれしきの事にびくともする其方ではあるまい。雷電暴風のたゞ中に、ルチエルンの湖を漕いだ覺もあるでは無いか。」テルはいよ〳〵身を震はし、眼する

存分

これしきの事

たゞ中

観念の眼をつぶる

どくゲッスレルを睨んだが、屹度覺悟して、無言のまま箙から二筋の矢を拔き取つて、弦に番つた。

ワルテルは向ふより「父様早く」と聲をかけるに應じて、「おゝ」とばかり、テルは亂るゝ心をおさへ、觀念の眼をつぶり、切つて放せば過たず、頭上の林檎を見事に射ぬきて、矢は遙の先へと飛んだ。どつとおこる感歎の聲。

ワルテルは落ちた林檎を拾ひ取り、「當つた〳〵」とはしり寄る。テルは夢中に次の矢を取つて、弓に番ひ、身を沈めて進まうとしたが、ワルテルがにこ〳〵して

ひしと抱く

手持なく苦りきつて

駈けて來るのを見て、始めて弓矢を投げ、ひしと我子を抱きしめて、男泣に泣きさけんだ。

流石のゲッスレルも茫然として手持なく、たゞ「許す。」とばかり苦りきつてゐた。

人々はテル親子を促して、早くこの場を去らせようとしてゐると、ゲッスレルは「暫く待て。」と呼び止めて、「なほ問ふべき仔細がある。其方今二の矢を番うたと認めたが、如何なる譯ぢや。」

テルは驚き、「それは弓矢執るものゝ習慣にございます。」ゲッスレル「だまれ。さ樣な詐で濟むと思ふか。いや

有體に白狀せよ

さもあらん

聽かばこそ

さ、其方の一命はともかくも助けて遣はす。包まず有體に白狀せよ」。テル「左樣なれば包まず申上げます。二の矢を番ひました譯は、萬一仕損じて、悴を殺しましたら、この矢を以て、恐ながら管領樣を射る決心でございました。」

ゲッスレルはうなづき、「さもあらん。いかにも其方の一命は助けて遣はすが、かゝる不敵の心を懷くと知つては、その儘にはさしおかれん。それ、家來ども彼奴を牢舍へ引つ立てよ。」と嚴に令を下して、人々が何と詫びても聽かばこそ、テルを固く縛して舟に乘せ、已も家來と共に打乘つて、湖上遙に漕ぎ出した。

草庵

四　三尺の庭

この頃は障子を明け放す日が多い。障子を明けると、すぐ前が一間半の高い煉瓦の塀だ。これは醫學博士某君の邸宅の入口の高塀の一部分で、この塀の內に在る幅三尺の土が、即ちわが草庵の庭である。

其處に一本の柘榴の木がある。この頃若葉が一寸許になつて、新鮮な黃色がゝつた綠の色を、惜しげも無くふき出してゐる。隨分亂暴な枝の出方で、殊に蘖(めはえ)が

不景氣な

十本ばかりも根元から出てゐるのを、皆其儘に伐らずに置く。それは其蘖も美しい綠の葉が出來て、いやな煉瓦の塀をすこしでも隱して呉れるからである。

柘榴に並んで、右傍に一本の不景氣な松の木がある。葉も半以上枯れてゐるが、其枯葉の中に、まだ青々した葉もある。今度梯子賣が來たら、梯子を買つて、木鋏を借りて來て、其枯葉を除けてやらうと思つてゐるが、梯子賣がまだ來ない。

其松の木の下に、山茶花がある。去年の暮、爰處へ引き移つて來た時、花が二輪著いて居たが、今は塵が一分

叢生

も積つてゐるやうな葉が五六枚ある許。山茶花から右へ二尺も隔つてゐる所に、十本許の親指ほどの竹が叢生してゐる。黑竹といふ竹であらう。いつか雪が積つた時、雨戸へもたれかゝつて以來、すこし風が吹く度に、五六本は手水鉢の上へ倒れかゝつて來る。朝座敷を掃除する時など、箒のさきで、外の眞直で居る竹の中へ割り込むやうにして起して置く。さうすれば、そこらが廣々とする。自分がたま〳〵髯を剃つて來た時のやうだとの話である。

手水鉢の下に一尺程の南天がある。横に廣がつてゐ

癖に

る癖に、脊の低い様子が、近處の弓屋の犬みたやうだ。

（虚子、寫生文集）

五　太陽の大きさ

地理天文の書に曰ふ、「太陽の直徑は八十五萬哩にして、其周圍は二百六十七萬哩、容積は三十二兆立方哩餘なり。」と。しかも其一立方哩とは果して如何程の大きさなりや、一立方哩とはあらゆる都府、あらゆる村落、あらゆる寺塔、あらゆる建物、鐵道も、軍艦も、地球上人間の力にて作り出せる一切の建築物、さては人獸

生きとし生ける

日子

蟲魚、生きとし生ける一切の生物をおし纏めて、優に其中に包含し得べき程の大きさなり。

一兆とは百萬の百萬倍にして、數字にあらはせば一、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇となる。即ち一秒時毎に三つづゝ鐘を叩きて、晝夜間斷なく一萬年間叩き續けざれば、叩き盡くすこと能はざる大數なり。

いま太陽は三十二兆立方哩ありとすれば、もし一人あり、太陽より一秒時毎に三立方哩の容積をもぎ取る力ありとせんに、全く太陽の無くなるまでには三十三萬年餘の日子を經過せざるべからず。又若し一

秒毎に一立方哩づゝの容積を積み上ぐることを得るとせば、太陽の大きさを積み上ぐる迄には百一萬九千年餘を費すべきなり。其廣大なる實に驚くべからずや。

六　ニュートンの失策

大理學者のニュートンはむつかしい問題を解きにかゝると、諸事夢中になつて考へ込むのが定例であつた。それに就て段々面白い話がある。

是も一つであるが、ある時にニュートン朝夙く起き

て、例の如く、「誰も來ぬやうに」と云つて、書齋に閉ぢ籠つて、何かは知らず、餘程むつかしい調べものに取り掛つた。

家内の人々は、朝飯を喫べには出て來るだらうと待つてゐたが、なか〳〵顏を見せない。主人に斷食をさせては濟まぬし、第一身體の爲に宜くないと云ふ評議で、下女に「鷄卵一つと水を入れた汁鍋を持つて、書齋へいつて鷄卵を煑て給事をするやうに」といひつけた。するとニュートンは、「自分で煑るから宜しい。早く彼方へ往け」といふから、下女はそのまゝ、鷄卵を机

眞黑になつて考へ込む

の上の時計の傍に置いて、「三分間お煮になるのです。」と云つて立ち去つたが、若しや又例のやうに、何事も忘れて居はせぬかと思つて、そつと來て見ると、下女の心配もことわり、ニユートンは眞黑になつて考へ込みながら、じつと手に鷄卵を握み、其かはりに時計を汁鍋の中へ打込んで、ゴト〳〵ゴト〳〵。

（和田萬吉、西洋笑府）

七　バクテリヤ

バクテリヤは極めて微細なる菌類にして、顯微鏡にて廓大するに非ざれば見ることを得ず。其最も微細なるものは、數千倍に廓大して始めて見ることを得。若し人體を此割合に廓大せば、其容積、富士山よりも更に大なるに至るべし。

廓大

バクテリヤは殆ど到る所に生存すれども、殊に塵埃、汚水、腐敗物などに多し。球狀の者あり、圓柱狀の者あり、螺旋狀又は線狀の者などありて、形一樣ならず。

くびれ

バクテリヤは概ね自體の分裂によりて繁殖す。即ち其體一定の大いさに達する時は、中央部まづ少しくくびれ、次第に細くなり、遂に分れて二個となるなり。

外界の事情

かくて各成長して原形となれば、又同様に分裂するが故に、其繁殖の神速なること譬ふるに物なし。バクテリヤは普通外界の事情の最も繁殖に適するときは、凡そ二十分乃至三十分毎に一回の分裂をなすものなれども、今一時間毎に一回の分裂をなすものと假定すれば、一個のバクテリヤは、一時間の後には二個となり、二時間の後には四個となり、三時間の後には八個となり、一晝夜の後には千六百七十七萬七千二百十六個の巨數となる。かくて五日の後に至れば、殆ど計算すること能はざる程の數に達して、其

充實

餘地なし

容積は地球上の大洋をも全く充實するに至るべし。されど實際にはかゝる大繁殖をなす餘地なく、又營養分も之に伴なはざれば、遂には其分裂を止むるに至るものなり。

バクテリヤは普通の植物の如き方法にて自ら營養分を取ること能はざれば、必ず他物に寄生す。其人體に寄生するものゝ中には、甚だ恐るべきものありて、屢生命を奪ふことあり。チフス、コレラ、ヂフテリヤ、ペスト、結核などの各種の傳染病は、皆このバクテリヤの寄生によりて起るものなり。バクテリヤは實に人

勁敵

類の勁敵なりといふべし。

されば吾等は常に其豫防を怠るべからず。石炭酸水、石灰などは皆よき消毒劑なれば、不潔の場所に撒布してこれを滅すべし。又衣服、家屋、庭園などは清潔にし、飲食物はなるべく一度煮沸したる後に用ゐて、其寄生を防ぐべし。殊にバクテリヤは健全なる身體に入りては、繁殖すること能はずして死滅すれども、虚弱なる身體に入りては、盛に繁殖して大害をなすが故に、吾等はまづ身體を健全にして、其暴威を逞しうする餘地なからしむべきなり。

煮沸

暴威を逞しうす

餘地なし

死にに死ぬ

されどバクテリヤは其種類甚だ多くして、其各種のもの悉く人類に害をなすには非ず。更に人類に害をなさゞるものもあり。又反つて人類に益をなすものも少からず。或者は酢、醬油、味噌、納豆などの食用品をつくり、或者は地中にありて植物の生育を助く。又物の腐敗することも、或バクテリヤの繁殖するが爲にして、吾等人類の不利益となること多けれども、若し世に此腐敗といふ事なかりせば、果して如何なる結果をか見るべき。太古より今日に至るまで死にに死にたる動植物は、地球上到る所に堆積して其有

慘憺

様誠に慘憺たる者あらん。然るにバクテリヤの、此等動植物を死ぬるに隨ひて腐敗せしむるが爲に、幸にかゝる結果を見ざるを得るなり。（文部省國定讀本）

八　硝子

寄與す

硝子は世界の文明に寄與する所多し。望遠鏡、顯微鏡、寫眞鏡、測量鏡等を始とし、諸種の器械器具に用ゐて、その用の廣くかつ切なること、殆ど他に比類なし。若し此世界より一切の硝子を取り去るとせんか、文明の進歩は忽ち頓挫して、容易に起つ能はざるに至る

頓挫起つ能はず

古墳

べし。

硝子の發明は東西とも頗る古し。埃及の古墳中より發見したる石棺の圖畫の中に、硝子製造の樣あるを以て推すれば、埃及にては紀元前二千年の頃、既に之を製造せしこと明なり。我國にても和泉國泉北郡なる大山の御陵より硝子の椀を發見し、又奈良東大寺の寶藏にも、經卷の軸、刀劍の飾、瓔珞、碁石など數種の火齊珠の今日に傳はれるを見れば、奈良朝以前仁德天皇の頃、既に我國に存在せしを知るべし。火齊珠（吹玉とも）、瑠璃（頗梨とも）、假水晶、ビイドロ、ギアマンなど

放冷

皆硝子の別稱なり。

硝子の製造は三段に分る。原料の鎔解、硝子器の製作、及び放冷これなり。

原料は硅石(水晶、燧石、硅酸砂)、石灰、竝びに炭酸曹達を主要として、器物により又色彩によりて、種々の混合物をなす。その混合物については、多少の祕密あること陶器の釉藥の如し。化學上よりいへば、何れも硅酸、固性アルカリ、及び諸種の酸化金屬の化合したる硅酸鹽に過ぎず。

古硝子(硝子のこはれ)亦鎔して硝子に再製するを得べし。東京市中の塵芥箱の中より拾ひ出す硝子屑一日二百貫目、麥酒瓶の缺屑二百八十貫目なり。二口一ケ年の總計十七萬五千貫目にして、之を硝子製造家に賣る價七千二百圓に及ぶと云ふ。されど硝子屑は其成分を知る事能はざるが故に、豫定の品を得る能はず、光澤なき下等品を製するに止れり。牛乳瓶等の如し。

豫定の品

其等の原料は適宜に調合し、よく〳〵搗き碎き之を坩堝に入る。坩堝は耐火粘土にて造りたる厚き瓶にして、擂鉢を伏せたるが如き竈にいけ込み、其口のみ

を外部に露出せしむ。かくて竈に火を焚きて、十五六時間熱すれば、原料はどろ〳〵に鎔けて、水飴の如き半液體となる。これを種（たね）といふ。

この時職工は長き鐵の管にて件の種を卷きて取り出し、飴細工の如くに、或は吹き、或は切り、或は形をつけて、種々の形に造る。仕事中に種の冷ゆる時は、仕事竈とて四方口の塔の形をなせる熱竈の中に入れて、熱を與へて又工を加ふ。數十人の職工、竈の周圍に集り、各管の尖に火の糸瓜の如きものを附けて、或は吹き、或は廻し、或はうち振り、或は引き伸ばして、立ち働く奇觀容易に形容すべからず。就中吹く事は仕事の大部分を占め、肺を激しく用ゐる職業なるが故に、十二三歳より四十歳までの間ならでは勤まらずといふ。

硝子の新製品は冷却爐に入れて放冷す。冷却爐は大小樣々なれど、普通は九尺立方位の煉瓦室にして、數個相連れり。作り上げたる品は、直にこの室にて徐々に冷さる。總じて硝子類の堅弱は、冷し方の遲速によるものにして、その理、熱き物を急ぎ冷せば、まづ外面空氣の當る部分のみ早く冷めて、内部の後れて冷ゆ

結局脆弱

レンズ

るが故に、結局分子の不平均を生じ、脆弱にして破損し易きに至る。之に反して冷すこと徐緩なれば、分子に不平均なく、實質平等にして堅固となるなり。

冷却爐は特別の構造により、初その熱度、新製硝子品と同様にして、極めて徐々に冷ゆる仕掛なり。放冷の時間は、並物は大概一晝夜なれど、上等の品に至れば數日を費し、その手數隨つて多し。明治二十九年獨逸政府より博覽會に出品したる天文用大望遠鏡は、同國エナ會社にて製造したる物なるが、其レンズは直徑四尺、世界第一のレンズにして、光線學上、分子の最

も均一なるを要するが故に、新築の冷却爐にて一ケ月餘を費して冷したりといふ。其手數想ふべし。

硝子の色彩は、陶器と同じく、熱度の加減にて多少の變化は免れざれど、通常紅色の上等品には黃金を用ゐる、並物には銅を用ゐる。銅は熱度高きに過ぐれば綠色となる。綠色には銅の外にクロームを用ゐる、青色にはコバルト、紫色にはマンガン、白色には鉛を用ゐる。他の數十種の色合は、製造家の工夫によりて一定せず。

製品十分冷却すれば、冷却爐より取り出して仕上を

なす。仕上場にては、數多の砥車、蒸氣力によりて回轉せり。職工は硝子器を取りてこの砥車に當て、或は底を平に磨り、或は模樣をつけなどす。砥車にて硝子を磨るには、一人の助手、兩手に濕砂を掬ひて鋼鐵の砥車に附くれば、砂は車と共に回轉して、硝子面を磨り耗し、荒研をなす。さて次には石の砥車に當てゝ其面を平にし、最後に柳の木車にて本磨をなす。最上品の本磨には羅紗車を用ゐるとぞ。

所長

硝子は歐米諸國製出せざる國無けれど、國によりてその所長を異にす。白耳義の板硝子、佛蘭西及び以太利の器具、裝飾品、獨逸の學術品、亞米利加の壓搾硝子等の如し。

日本にても工場は大小二百許あり。就中東京の岩城工場にては、寫眞鏡、顯微鏡のレンズを除き、その他は大概製造し得べしといふ。

大阪地方にて製出する粗造品は、香港、西比利亞、支那、朝鮮に輸出して、其額一ヶ年七十萬圓に達せり。

九　螢

熱帶地方で螢が澤山集つた處では、其螢がみな一齊

一齊に光り一齊に消える規律

に光を發するので、丁度電が閃くやうであるといふことは、人が皆能く知つて居るが、日本の源氏螢もさうであつて、同じ時に澤山木に集ると、すべて同じやうに發光の調子を揃へて、ぴかり〳〵と一齊に光り又一齊に消えて、これにはよほど規律がついて居るやうに見える。

それで五月の中程から六月の初にかけて、螢の出盛りになる時節の、暑くも寒くもない華氏六十度の時候では、一分間に二十六度光る。余は一晩に七度も八度も計つて見たが、一齊發光の度數は、何時も二十六

明滅

氣が立つ

度であつた。他の晩に計つたときには、二十七度に昇つた。しかし其一匹を捕へて、指の間に挾んで、その明滅の度數を計ると、一分間に六十三度位である。それは多少螢の氣が立つて居るからで、すべて勇んだり、怒つたりする時には、その度數や光の量は增すものである。かのシェークスピアの或詩の中に、「かれの目は恰も螢のごとく、怒る度ごとによく光る。」とあるは、この事實を言つたものである。

その上に、また外氣の溫度が增しても、發光する度數は增すのであつて、米國產の一種の螢は、殊にさうで

ある。されば溫度が降ると、其發光の度數も、それにつれて少くなるのである。これは丁度鳴く蟲の音の數が、溫度の高低によりて違ふのと同じことで、蟲の鳴く音の數を聞いて、屋外の溫度のおほよそが知られるのであるから、螢の發光の度數を見ても、同樣のことが出來ようと思ふ。

しかし發光の度數は、螢の種類によつて異なるから、これは前以て心得ておかねばならぬ。例へば源氏螢では、發光度數は前に言つた通り、指の間で捕へて計ると、一分時間に六十三度であるが、平家螢ではそれが非常に多く、一分時間に二百度以上である。

一晩、川端で螢が光る樣子を見て居ると、なか〳〵面白い。八時頃から段々と盛になつて、十一時頃には殊に眞盛であるが、この盛になる時分には、慰に螢狩に來て居る人だちは、はや家にかへつて居るのであつて、

呼ぶ聲は絶えて螢のさかりかな。　丈草

と云つた通りである。

前に言つた一齊明滅は、夜半前に起るのである。それに、螢は始終光つてゐるものでは無くして、今まで木

當座

に止つて居たかと思ふと、急に飛び始め、十分間程亂れ飛んでは、また木に止り、光も薄くなるが、十分間ほどたつと、復飛び始める。かうして一時、二時となると、皆木の葉に靜に止つてしまひ、光も甚だ弱くなつて、僅かに認められる位になり、其あたりは殆ど眞の闇となるけれども、此時に若し一匹の螢が光を放ちながら、ふと他から飛んで來ると、今まで光を止めて居た多くの螢が、これに應じて亦一時に光を放つて、永くは續かぬが、其當座は再び近邊が明るくなるものである。これは、一匹の螢が光り出すと、他のものが皆

競爭心

競爭して眞似をするのかと思はれる。前に述べた一齊明滅も、宵の間、螢のこの競爭心が盛な時に起るのではないかと考へられる。

（渡瀨庄三郎、螢の話）

本色發揮

前者

一〇　外國航路

我邦の外國交通は、從來專ら外國船舶の便を藉りしが、輓近國運の隆興につれて、航海の業亦大に發達し、益、海國たるの本色を發揮するに至れり。

現今我邦に於て、外國航海の業を營むものは、日本郵船會社と東洋汽船會社との兩會社にして、前者は朝

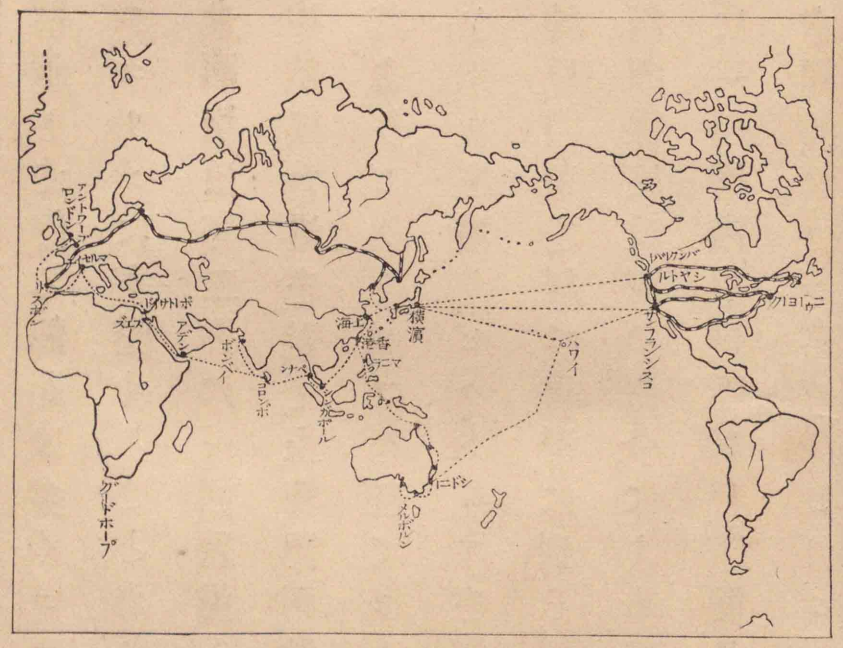
後者

鮮、支那、印度、濠洲、北米、歐羅巴等に到り、後者は北米及び南米航海を爲す。

郵船會社の歐洲線は、二週間毎に一回横濱を發し、神戸、門司に寄港し、上海、香港を經て、赤道直下の新嘉坡に寄り、コロンボに到り、印度洋を横切り、アラビア海を過ぎ、紅海及びスエズ運河を經て地中海に入り、佛國マルセーユ港に寄港し、英國倫敦にゆき、遂に白耳義のアントワープを終點と爲す。

航程一萬一千九百十七海里、航海日數三十二日なり。

歐洲航路に用ゐる船舶は、いづれも六千噸以上の双



螺旋大汽船にして、船中の設備は大に整ひ、客室美麗にして、運動場には各種娯樂の機關を具ふ。

孟買線は四週に一回横濱を解纜し、神戸、門司、香港、新嘉坡、コロンボを經て、英領印度の孟買に到り、棉花等を

積載して歸る。歸路は多くコロンボに寄港せず、チュチコリンに寄港することあり。

往航

米國線は毎二週に一回、香港、シヤトル兩港に發着し、往航は香港を發し、上海、門司、神戸を經て横濱に來り、

復航

其よりビクトリアを經てシヤトルに到り、復航はシヤトルを發し、ビクトリアを經て横濱に來り、其より神戸、門司を經て香港に到る。

特定航路

濠洲線は政府の命令による特定航路にして、毎四週に一回横濱を發し、神戸、下關、長崎、香港、マニラを經て、木曜島、タウンスビル、ブリスベン、シドニーに寄港し、

メルボーンに到る。

其他毎週一回北清沿岸航海を爲し、又朝鮮及び浦鹽斯德への航路あり。かくの如くして、我國船舶の到らざる所は大西洋航路あるのみ。

東洋汽船會社の北米航路は一年十四回、横濱より桑港に直航し、同社の南米航路は一年五回、横濱を出發し、神戸、門司、香港、新嘉坡を經て、祕露國カリアオ港に寄港し、智利國イキテ港に到る。而して歸途亦同一の航路を取るなり。

兩會社の船舶は、平時に在りて交通商業の大機關た

るのみならず、戰時に於ては或は運送船となり、或は武裝して假裝巡洋艦となり、交戰の事業を助く。日露戰爭に於ける金州丸、常陸丸の慘事、日本丸、香港丸、の偉勳は、諸子の尙記憶する所なるべし。

放縱懶惰
姑息無氣力

一一　船に殉したる船長

世に忌むべきは放縱懶惰、もしくは姑息無氣力にして、責任を守らず、職務を忽にするものなり。之に反して、世に尊ぶべきは、責任を重んじて職に忠なるものなり。殊に其職に殉するものに至つては、人間の事業

職に殉す

犬死

中、最も神聖なるものといふべし。

隊長にして其職を忽にせんか、部下の數百人は犬死をして、終に全軍の大敗を來すことあるべし。醫者にして其職を忽にせんか、癒ゆべき病氣も癒えず、また命のある人も空しく死亡すべし。船に乘る人の神とも佛とも賴むは、その船長なり。乘組人の生死安危は、

一呼吸

一にかゝつて船長の一呼吸にあり。もし船長が誤つて、その粗忽よりして人一人の命を失ふとも、責任を帶びて引決する所なかるべからず。これ船長たるものゝ職務なり。

引決

明治三十六年十月の末、東海丸は北日本海を航しけるに、風烈しく、浪あらく、密雪空を掩うて咫尺を辨ぜず。あはれや露船プロクレス號につきあてられて、船體を損じて遂に沈沒せり。船員、乘客すべて九十七人の中、六十人は露船のボートに救はれたりしが、三十七人ははかなく溺死せり。船長久田佐助氏は、迎へに來りし露船のボートを却け、從容として身を船にしばりつけ、綱を引きて高く汽笛を鳴らしつゝ、船と共に海底に沈沒せり。嗚呼壯なるかな。

東海丸が露西亞の船と衝突したるは、必ずしもその

咫尺を辨ぜず

從容として

船長の罪にあらず。然れどもその責任を負ひて船に殉したりしは、これ實に義勇公に奉ずるものにして、船長たる者の龜鑑なり。眞の日本男子なり。かく職を重んじて死を輕んずることは、日本男子の特性にして、西洋人には類稀なる所なり。露人之を見て舌を捲いて驚歎したるも、宜なるかな。嗚呼大和魂はなほ未だ泯滅せざるなり。

（大町桂月、家庭と學生）

龜鑑

泯滅

一二　小笠原島だより

一書拜啓仕候。今回出發につき萬事御配慮を蒙り候

追手の風

段、深く奉謝候。五月十五日午後二時半横濱出帆、途中兩日程風雨强く、少々困難仕候へども、常に追手の風にて、船の走ること一時間平均八浬半位の割にて、同月廿二日當小笠原島に到著仕候。當地著後無風若しくは南風にて、出帆するを得ず。いづれ近日出發の運に相成るべくと存候。

當島は餘程有利の地なる樣これまで聞き及び候處、實際は大に相違し、瘠地にして且山坂多く、平地甚だ稀なれば、決して望あることを覺えず。たゞ氣候内地と異にして、パインアップル、バナナ、など出來、又珈琲、

薪水

マニラタコの木(臺灣砂糖の風袋を製するもの)其外内地に見慣れざる草木も出來、海に正覺坊を生ずる故、内地の人の目に新しくて、かくは申しふらしたることゝ思はれ候。畢竟陸地の開墾も、水産の漁獵も皆小規模にして、所謂出稼商人、漁夫などの行ふ所に過ぎず候。母島は少々は宜しき由に候へども、決して大に勝らざることは、其形の小なるにても推測するを得べく候。但父島の港は非常に宜しく、若し南洋の通商繁昌するに至らば、此島は薪水の爲に、是非とも碇泊せざるを得ざる處たるべしと存候。

當今當地の暖氣は日中八十二三度にして、單衣一枚にて宜し。夜に入りては涼風吹きて、眞に爽快を覺ゆ。沿岸に油桐と云ふ樹あり。葉茂りて鬱々たり。此地にて暑を凌ぐを得るは、全く此樹の爲に候。歸化人の家にも參り、色々話など致候。歸化人は米國人、若しくはカナカ人種(南洋諸島人種)、若しくは其混合種なり。皆徒跣にて土上を歩み、多くはカノー船にて正覺坊を捕り、掌大の玉蜀黍を植ゑ、以て其生計を立て、憐むべき生涯をなせり。文明人の末にも、かくの如き者あるかと怪しまるゝ程なり。然し蓄積心は內地の人に比すれば盛にして、其金庫の內には、許多の貨幣を埋藏する者ありと申すことに候。

歸化人

混合種

徒跣

蓄積心

埋藏

我天祐丸が將に此島に達せんとする時、定期船駿河丸は此島を出發致候。島司は此船にて東京に出でたれば、小生面會すること能はず。小谷三郎君其留守役にて、非常の厚遇を受け申候。身體は强健にして、內地に居りし時より氣分常に愉快に候。御安心下され度候。匆々頓首。

(田口卯吉、帝國讀本より)

一三　ジャバ旅行

蔬菜

ウエルテフレーデンよりサマランに到らんとて、七月三日早朝汽車にて出發せり。午前十時頃より、景色に有名なる地方に入りたれども、綠樹繁茂して岩石の突出せるもの少く、鐵路は高き山地を過ぎて、割合に涼しくはあれど、格別の快味なく、又谷の深く切り込みたれば、嶮岨なる狀態も見ること能はず。されど到る處に水田幷びに珈琲園、蔬菜園等の多きは驚くべし。午頃に至れば、午前に車掌に賴み置ける辨當、一の停車場より車中に運び來れり。之を見るに瀨戸物製の器にして、四つ重ねの蓋物の如く作れるにて、ビ

夢を破る

ステキ、燒きたる馬鈴薯、胡瓜、バナナ等を入れたり。又之にコップと小刀と肉刺と附屬して、これ等の物全體を一度に木製の框に入れて、提げ得る樣に造りたり。食事終れば、先に運び來りし男、代價と酒手と空器とを受け取りて去れり。これは次の停車場にて下車するなるべし。

晝食の麥酒に睡氣を催して、思はず眠れる間に、線路の屈曲に遇ひて、汽車は方向を變じ、燒くが如き熱帶地の太陽の寢たる顏を直射するに、忽ち夢を破られて、再び窓外の觀察を始むれば、我日本の富士山に似

寄生

たる山、午前も午後も處々に聳えて、甚だ奇觀たり。マオスに近づくに及んで、十數里以上の間に恐るべく繁茂したる深林あり。見上ぐる程の大樹に蔓草の纏ひたるあり。枝より蔓草の如き者の垂れて、地に達せるあり。一本の樹に數種の植物の寄生したるありて、實に熱帶地の深林の狀態は、亂雜といふ詞を說明するに足る。日暮るゝ頃、沼の上に螢の飛び行くを見る。此夜マオスに一泊せり。ジャバの汽車は夜行せざるが故なり。翌朝午前五時過、マオスの停車場より再び汽車に乘りて、サマランに向ふ。

園圃

統御

資金と忍耐力

此途上、火山の多く見ゆること、耕作の良き大原野の狀態等は、昨日見たるものと異ならず。オランダ政府が鐵道を敷きたる大工事の困難、實に察するに餘あり。道路の完全なる事、土人の家屋、并びに園圃の規則立てる取締等も、汽車旅行にて既に十分に目に附く程なるは、オランダ人が土人統御の術に富めるに因れるか、又は土人が特別に柔順なるか、兩方の天性俱に存せるが故なるべし。然れども何よりも大切なる資金有らずんば、決してこゝに至らざるべく、特別の忍耐力有らずんば、何ぞ能く西洋より此熱國に來り

遊食

て、交通、製造、其他の大經營を爲す事を得ん。然るに我國は元來東洋の一貧國にして、國に遊食の輩多く、有爲の人の活力は、空しく隱居、食客等の飼料に失ふ處少しとせず、悲しむべし。

此汽車中に坐して、乘客の出入を眺むるも亦一興なり。日本流の傘を翳して、日を除けて行く人あり。昔の公家方の行列の繪などに見ゆる美麗の長柄傘に、金紙の飾などしたるを從者に持たするもあり。又絹布の美衣を纏ひ、黃金の飾を用ひながら、跣足にて往來する土人の貴族もあり。小さき馬繫場の屋根低きやうなる處に、種々の雜品を竝べて、土人の群集喧噪せるは村の市場なり。大道の所々に、道幅一杯の大家屋を建てたるが如きものあるは、熱帶地の用意として人馬の休息所なり。辻番の如き家、中には全く竹にて造れるもあり。こゝに奇妙に抉りたる木を吊りたるは、ボコンボコンと打つて時を報ずる道具にて、又夜間寢ずの番の者の盜難、火災等を急報する用に供せるなり。村の道路の家の前に小石を積みたるは、每家にて分擔すべき道路修繕の用意なり。街道の並木は廣き道路の上に天然の綠門を作り、村家に鬱生せる

綠門

衆寡敵せず

太平を謳ふ

椰子の木は、四十本にて一家の人の食物を、常に供給するに足るべき果實を生ずといふ。

ジャバの土人は凡そ三千萬人にして、オランダ人は僅かに五萬人に及ばず。衆寡敵せずと雖も、よく平和を保ちて、土人は良政と壓制との調合を受けて、無事に太平を謳ふが如し。羨むべき事なり。

ジャバの政治は能く行き屆きて、舊來の土人の王は、貴族として隱居の身となり、今や全く兵馬の實力はなけれども、中等以上の土人がなほ、脇差の如きものを、腰には差さずして、背後の帶に挿みて歩くもをか

探求

富源

しきなり。是格別の用を爲すには非ずして、所謂臆病武士の飾なるべし。又人種學上の研究、土人語の調査、古物、古跡の探求、植物、動物、鑛物等の研究も、本島には既に餘程進み居りて、バタビアの諸博物館、幷びにボイテンブルグの植物園は、實に觀るべきものとす。汽車サマランに近づけば、有名なるチークの森あり。その廣大なるは洵にジャバの大富源たるに恥ぢず。但し其樹木の落葉期は八月頃にして、この期節は熱帶地の霜枯とも稱すべき景色なり。さてサマラン市街に著し、ジャバ第一の旅店ホテル、パビヨンの迎の男

と共に、馬車に荷物を移して、同店に投宿せり。

（神保小虎、太陽より）

一四　馬

吶喊の聲

進軍の喇叭一たび響けば、天を動かす吶喊の聲、地に轟く銃砲の音。まつしぐらに敵陣目がけて、鐵蹄高く空を蹴る。この時鞍上の人と、鞍下の馬と心は唯一つ。

屍を馬革につゝむ

馬は勇士にとりて戰場無二の親友にして、屍を馬革につゝむは武人の願とする所なり。

奇捷

高綱景季が宇治川の先陣、九郎義經が一の谷の奇捷、

膽略

皆馬の健脚の力にあらずや。鞭聲肅々夜河を渡りて、單騎敵陣に斫り入りし謙信の膽略、目にあまる賊軍をかけ散らして、靜に七生の語を殘しゝ正成の忠誠、馬はいかばかり其主の名譽を發揮せしぞ。ケーザル、ハンニバルを乘せて、ルビコンを渡り、アルプスを越え、成吉汗、奈破翁を乘せて、亞細亞、歐羅巴の全土を蹂躙す。古來の勇將は、其戰功の一半を馬に頒たざるべからず。

蹂躙

一半を頒たざるべからず

馬は戰場に於る勇士の親友たるのみならず、平時に於る農夫の親友なり。農夫は馬の力によりて田を耕

忠實

し、馬の背によりて重きを遠きにいたす。金鞍の公子は之を以て輿車の代とし、或は之を競爭せしめて娛樂の具に供す。人間に忠實なる、馬の如きものはあらざるべし。

馬の人に盡くすことかくの如くなるに拘らず、人の馬に報ゆる何ぞそれ酷なる。長圍數月、城中の糧食已に盡くるに及びては、人はまづ馬を屠りて其肉を食ふ。その老いて首は低れ、脚は弱きを見るや、鞭撻至らざるなく、皮膚爲に爛るゝに至ることあり。馬死すればその皮は剝がれ、その骨と蹄とは刻まれて、種々の器具に作らる。馬よ馬よ、汝何ぞ天に向つて人類の無情を訴へざるや。

鞭撻至らざるなし

一五　熊本守城概記

鼓舞

今般鹿兒島縣賊徒暴擧の勢あるにつき、當臺防戰の儀に就ては、進んで之を薩界の險に要し、或は之を半途に迎ふるの略なきに非ず。然るに當城の兵、去冬不意の襲擊を受けしより、兵卒の氣力未だ全く舊時に復せず、諸士官專ら士氣を鼓舞するに注意し、或は招魂祭に依り、或は競馬、或は烟火、或は角力等、總べて士

消息を通ず

勝算

士氣沮喪

氣を勵ますの事に勉むと雖も、賊徒素より强兵の名あり、且其怒氣の發する所、容易に當り難し。加之縣下の士族、賊に消息を通ずる者少からず。故に進んで熊本市街を保護せんとすれば、賊脚下に生するの患あり。且決死の兇徒を平原曠野に防ぐ、其勝算固より期し難し。一旦迎へ戰つて敗るゝ時は、士氣沮喪して大に賊勢を長ずべく、已に沮喪の兵を以て、始めて守城を謀る時は、遂に堅守を期し難し。是今般熊本を堅守し、以て賊の據る所を失はしめんとする所以なり。陸軍卿曩に我に示すに、攻守共に適宜にすべきを以

展望

糧食灰燼に歸す

徵收

てせらる。蓋し本臺の存亡は、西國一般の人心に關するを以てなり。我輩の所見亦全く此にあり。故に橋梁を撤し、砦柵を結び、通路を塞ぎ、要地に地雷を埋め、障碍の家屋を毀ち、展望を便にす。準備稍成るに垂んとして、本城忽ち火を失し、糧食盡く灰燼に歸し、餘す所たゞ彈藥諸器のみ。故に止むを得ず一時民家に徵收し、以て數旬を支ふるを得たり。

賊素より本臺を輕侮し、一朝にして之を拔くべしとなし、二月廿二日、同廿三日、力を極めて攻擊す。我兵期する所の略に依り、步砲工各兵を配置し、十分防戰す。

長圍の策

賊遂に退き、長圍の策を決するに似たり。是に於て本臺賊中に孤立し、外情を探知するに由なし。加ふるに、

心算

我小倉營所の兵、二月廿二日を以て著臺すべき心算なりしも、途中障碍を受くるを以て來る能はず。故に兵數寡少、守る可くして攻むるに足らず。益、堅守の方略を固うす。

賊已に兵を分ちて、官兵の熊本に入るものを防ぐ。賊兵已に分ると雖も、縣下の士族等賊に黨する者多く、

隙を窺ふ

我隙を窺ふの虞あり。且官兵の小倉より來る者、其何の地方に在るを知らず。來援の官軍と賊兵との間隔

も亦知るべからず。或は賊の後路を突かざるの悔なしとも云ふべからず。因つて官兵の情況を知らんと欲して、人を遣る數度に及ぶと雖も、其功を遂ぐる能はず。獨り典獄宍戸正輝の其目的を達するあり、彼我兩情悉く知る事を得たり。是に於て策を決し、官兵の大軍、山鹿、木の葉等の賊を破るを待ち、われ敗賊の側面を攻擊し、尾して川尻、八代を占め、賊をして足を止むるに地なからしめんとす。

既にして官兵漸次進擊すと雖も、賊田原其他の險に據り、拔き難きを聞く。且當臺糧食の如き、百方收聚の

策をなすと雖も、遂に盡くる期あらんとす。是に於て策を決し、糧食未だ全く盡きざるに及び、周圍の守線を短縮し、兵若干を以て、本月八日を期し、植木口に向ひて圍を突かんとす。適、前一日、川尻口に當りて砲聲の盛なるを聞き、又之に應援するの要を生ぜり。且川尻口は、道路平夷にして容易に官兵に合するを得べきを以て、遂に前策を轉じ、八日拂曉急に川尻口に突貫し、以て官兵の進路を開くに至る。是當城戰略の大概なり。書して以て總督殿下に獻ず。

明治十年四月十五日

熊本鎭臺司令長官

陸軍少將　谷　干城

一六　祇園の夜鬼

ふりしきる　北面の武士　且光り且消ゆ　魂を銷す

五月の雨ふりしきりて物すごき夜、白河法皇祇園の社東に潛行し給ふことあり、平忠盛北面の武士にて隨行し參らす。

折しも社頭に怪しき物あり、毛髮は白がねの針を束ねたる如く、身に青き光ありて、且光り且消え、こなたをさして近づく樣なり。人々魂を銷して怖るゝ事限

狐狸の業

無し。法皇忠盛に仰せて射しめらる。忠盛思ふやう、「これ定めて狐狸の業なるべし。社前に血を流すもいかがなり。手捕にせん。」と思ひて弓箭を投げ捨て、やには に走りつきて之を捉ふ。見れば一人の老僧の、神祠に點燈せんとて來れるが、頭に麥稈を戴き、左手に油注を提げ、右手に火入を持ち、雨に火を消させじとて、行く行くその火を吹けるなりけり。

法皇は大に忠盛の膽勇を賞し給ひぬ。

一七　京都御所拜觀の記

神々し

都の春はたゞこの九重の中に籠れるが如し

里内裏

京都御所を拜觀したる時ほど神々しかりしことなし。わが拜觀したるは四月半頃なりしが、殿掌なる人に導かれて、かしこゝ廻るに、うらゝかなる都の春は、たゞこの九重の中に籠れるが如く、踏む足も空に、人間の世界を出でたる樣なり。

私に承るに、皇居は初よりこゝにありしにあらず。平安朝の末より、折々の里内裏となり、北朝の頃よりこの地に定りしなり。今より百十餘年前天明の大火の後、幕府勅命を受け、老中松平定信に命じて、新に造營の工を起す。從來略式にのみなり行きし皇居も、この

儼然

……ぞかし

故實

節會

時より儼然として舊制に復したり。然るに安政元年また火災に遭ひ、更に造營の工事あり、概ね定信が定めし式に從はしめられたる、即ち今の御所ぞかし。紫宸殿、清涼殿等は、定信が深く故實をたゞし、平安朝の舊制に復し、今の御所も亦これに倣へるものにして、千年の昔を眼のあたり見る心地す。

紫宸殿は皇居の正殿にして、南面し、其前に南庭あり。階前の左右に左近櫻、右近橘の二本の樹ある外は、塵も止めず。今は春の日の、一面に敷きつめたる砂を射て、眩きばかりなるが、元日の節會に、ほのぐと明け

賢聖障子

御起居に適せず

はなれたる初日の光など、いかにめでたからんと覺ゆ。殿は廣き一面の板敷にして、背に唐代の賢臣を畫ける襖あり。所謂賢聖障子にして、昔は巨勢金岡の筆になれるものありきといふ。明治元年今上天皇陛下はこゝにて御即位の式を擧げたまひしなり。

清涼殿は昔は主上の御居間なりしが、世移り風變りては、日常の御起居に適せずなりて、近世は唯上古の形を存したるなりと申す。正面の母屋に畫の御座あり。御帳臺を立つ。傍の塗籠は夜の御殿とて、御寢所なり。左右の別室、一方を殿上といひ、殿上人の宿直する

年中行事

所、一方に藤壺の上局、萩の戸、弘徽殿の上局あり。後に朝餉間、臺盤所、鬼間等あり。前の廣廂に立てたる衝立に、年中行事障子、昆明池障子あり。一は年中行事の次第を記して、殿上人が備忘に供し、一は漢の昆明池を畫く。昆明池障子に近く、荒海障子あり。手長、足長が魚を捕ふる圖を畫く。殿上の外の渡廊に跳馬障子あり。上古は金岡の筆にして、夜々拔け出でゝ、萩の戸の萩を食ひしかば、勅ありて轡を畫き加へしめられたりと傳ふ。清涼殿は東面して、階前左右に河竹吳竹を植ゑ、御溝の水その側を流る。

拜謁

林泉の巧いふばかりなし

東山一帶一眸の中に入る

九重雲深し

その他には小御所、御學問所、常御殿等あり。何れも近世の樣式なり。小御所、御學問所は謁見など仰せつけらるゝ所、折により拜謁者の階級によりて、こゝかしこの別あり。常御殿は即ち主上の御居間と申す。その東の御庭、林泉の巧いふばかりなし。蟬の小川を堰き入れて池を湛へ、池邊には花木を植ゑて、四季の眺絶えず。東山一帶また一眸の中に入る。殊に彼方の木立少し切り下げたるは、如意嶽の大文字の火を望みたまはんが爲とぞ。

一わたり拜觀してよくは覺えず、九重の雲深きわた

りの事を書き出づるも畏しや。

一八　朝鮮京城

山河襟帶

京城は朝鮮の皇城の在る所、山河襟帶の形勝、稍日本の京都に似たり。北漢山の北に聳えて、麓に昌德、景福の兩王城あるは、東山の麓に祇園、清水、知恩院あるが如く、南山の半腹和城臺の邊に茶屋の軒を列ぬるは、嵐山より嵯峨、御室の規模を小にしたるかと思はれ、市街の中央を流るゝ川には、大廣通橋、長廣橋、水標橋、河里橋、太平橋の五大石橋を架すると、其河磧に白き

河磧

衣を洗濯して曝す所、何ぞ其趣の西京の四條河原邊に似たるや。其川水の流れて漢江に注ぐは、鴨川の末の澱河に注ぐとも見つべく、婦人の頭に物を戴いて歩行するは、八瀬、大原邊のそれと最も肖たり。

雅致に富む

京城の家屋の概して粗末なるは、京都と比すべくもあらねども、昌德、景福兩王宮の庭苑の廣くして雅致に富むは、大宮御所の御苑に比べて多く遜色無からん。

遜色なし

賀茂川の水の西に流るゝに比べて、此處のは東に流るゝと、其川水の清からずして、また珠を敷きたらん

徑庭なし

様なる賀茂川の河磧なきも、其水にて純白透明の韓人服を洗ひ清むるを思へば、水質は多く徑庭無きが如し。

京城は一に漢城と稱し、李朝五百年間の都府、方今戸數約四萬、人口約二十萬、朝鮮第一の都會なり。其周圍は五里餘にして、高さ十尺乃至二十尺の城壁を繞らし、石を疊みて築きたる八箇の城門あり。京城の市街は此城内に在り。北に白岳、鷹峯を負ひ、西北に仁王山屹立し、東は駱駝山聳え、南は木覓山に面す。其木覓山は一に南山と呼び、白岳の連峯を稱して一に北漢山

矮陋

とは言ふなり。かく四方に山を繞らし、都府は其間に在り。以て其地勢の甚だ日本の京都に似たるを知るべし。

市街は中、東、西、南、北の五署に區劃し、更に其中署を八坊、東署を七坊、西署を九坊、南署を十一坊、北署を十二坊に小分し、各坊亦分れて、すべて三百四十契となる。市區は斯く整然たるも、道路は不潔に、家屋は矮陋に、外國より來るものは、これにても都府なるかと疑ふ。唯東大門より西大門に通ずる本街道と、南大門より鐘路に到る街路とは、道幅十間乃至二十間、市區改正

肩摩轂擊

目貫

後の東京に似たるあり。

市街の中心たる鐘路は、十五間乃至二十間の道幅常に白衣の土人を以てみたされ、車馬輻湊、肩摩轂擊、商業甚だ盛にして、流石は韓半島首府中の目貫たるに恥ぢず。其名づけて鐘路と呼ぶは、四辻の一隅に高さ一丈餘、周圍二丈餘の大鐘を置き、古來毎夜七八時の頃と午前三時とには、必ず之を撞くの慣例なるに由る。元來京城の商業は、毎朝南大門と東大門内及び其他の各所に市場を開き、穀類、魚類、肉類、野菜類等を商ふ外、多くは鐘路に於て取引せられ、其處には六矣店

專賣權沒收

組合に加盟す

と呼ぶ問屋あり。六矣店とは、絹織物を販ぐ立店、木綿、金巾類を販ぐ白木店、布類を販ぐ布店、乾魚、鹽魚類を販ぐ魚物店、紙類を販ぐ紙店、及び麻苧、紬類を販ぐ苧店及び綿紬店の謂にして、此等の六矣店は各政府より專賣權を得、其他の者にして之を販げば、家屋は沒收せられ、且獄に下さる。故に此等の商品を販賣せんとする者は、免許料を納めて組合に加盟するの外なしとぞ。試に早起して南大門内の大通に開ける市場に到らんか、白衣の土人は廣き道路を塡めて、鯛、小鯛などの魚類を販ぐ者あり。白菜、葱、蒜等の野菜を陳列

喧々囂々

流石に……なる

する者あり。扇の如き形せる籠に入れたる雞を負ひながら立ちて賣る者もあれば、此等を買はんとする者もあり。さては長き烟管を啣へながら立ちて見物する者、胸の邊まで隱るゝ喪中用の大竹笠を冠りて其傍を徘徊する者、松枝の薪を牛背に載せたる總角（チヨンガー）の青年の、高く叫びながら群がる中を曳き歩く者、頭上に水壺を戴いて群集を押し分くる婦人など、喧々囂々、容易く通り過ぎ難し。其群集の間、電車鐵道は無遠慮に往來しつゝあれども、割合に負傷者も少しとは、流石にのんきなる韓人も、生命の危險は恐れて之

アルバム

道樂

開卷第一

を避くることを怠らざる者の如くなるも妙なり。

（坪谷水哉、韓國寫眞帖）

一九　僕の寫眞帖

僕の級の前島は郵便切手の蒐集に熱心で、古今萬國の珍しい切手は、盡く其アルバムに收めてゐる。岡は動物標本を道樂とし、蝶、蜻蛉の種類既に五百種に達したといふ。僕は元來虛弱で屢、病床に就くが、僕の寂しい悲しい心を慰めるのは此寫眞帖である。

開卷第一のは僕の伯父である。四十位で、肥つて、鬚が

薄くつて、今にも笑ひ出しさうな顔だ。地方で郡長をしてゐる時に撮つたのだから、奏任官の禮服を著てゐる。僕の生れるから五六歳の時まで、この人の世話になつてゐた。僕の名を謙と附けたのもこの人だ。

次は僕の一家族で、まん中のが僕の祖母、その右左が僕と僕の妹、兩端が父と母だ。後に並んで立つてゐるのが、姉とその夫の原さんだ。祖母さんと僕の妹とが一番善く撮れてゐる。原の兄さんは平生は快活だのに、すましてゐるから可笑しく見える。僕は帽子を深くかぶり過ぎたから、目から上は眞つ黑に映つてし

手札形

まつた。この外に兄があるが、洋行中だ。

次に何も挾まずにあるのは、僕の從兄の龍馬さんが今年外交官試驗に及第して、朝鮮統監府に役人をしてゐる、それが新しくとつたのを送つてよこす約束になつてゐるから、明けておくのである。どゞいたらすぐこゝに挾む積りだ。「さぞ立派になつてゐなさらう」。と母はいつてゐる。

次の手札形のは僕の小學校時代の受持先生で、小野田といふ先生だ。濃い眉毛で、頰骨が出張つて四角な顎で、こはさうな顔だが、大層生徒を可愛がる。みんな

新形

が實の叔父さんの樣に親しんだ。

次の眞つ四角な新形のは高見といふ保險會社員だ。兄が亞米利加で一二年懇意にしたといふ事で、先頃始めて僕の家へ來て、僕にこの立派な寫眞帖をくれた。「寫眞帖は外國では廉いものです。」といつてゐた。ナイヤガラの瀑や、ロッキー山中の鐵道の事など僕に話してくれた。

次に六十位で、坊主頭で、被布見た樣な十德とかいふものを著てゐるのは、謠曲と挿花の先生だ。姉がまだ原さんへ嫁かぬ以前には、この人の處へ通つてゐた。

丹田宗匠

今も父に謠曲を教へに來る。「意を丹田に收めて。」といふが、この人の口癖だから、丹田の宗匠と名をつけられてゐる。

一點張

次は說明に及ばず赤十字社の看護婦だ。僕が三年前腸窒扶斯で二ヶ月ほどわづらつた時、看護に來た。恢復期とかに、僕は非常に物が食ひたくつて、母も食はせたくつて色々に言つても、「いけません〳〵。」の一點張で、しまひには眼をむいて怒り出した。しかし僕は其お蔭で生命を取留めたのだ。母もそこで大層悅んだ。胸にかけてゐるのは日露戰爭の時貰つた勳章だ。

次のキャビネ形のは洋行中の兄だ。先々月英吉利のケムブリッジでとつたのだ。横向の半身で、姉は大層褒めたが、妹はいやな兄さんにおなりになつたといつてゐる。

サンダウが出た。裸體で腕を組んで、いかにも强さうな。サンダウは何時も僕見た樣に虛弱でをつたが、奮然志を起して體育術を研究して、自身發明の方法によつて、二十年間に今日の體格力量を得、其運動法は世界に採用されてゐる。僕、サンダウの樣になりたい。」

次のは東鄕大將だ。東鄕大將は眞面目な謙遜な顏で、

整理

ちやんと手を前に重ねて、いつでもこの寫眞だ。もつと勢よく司令塔の中か何かで、眼を瞋らして艦隊に號令でもしてゐる處が見たいと父にいつたら、父は「いや〳〵、矢張この方が東鄕さんの東鄕さんたる處が見えて善い。」とおつしやつた。サンダウのと東鄕さんのとは、店で買つたのだ。

これが僕の寫眞帖の第一卷だ。其外大判のはまだボール箱に一杯ある。いたきまぬうち整理しておきたいと思ふ。

二〇　星と花

同じ自然の御母の、
御手にそだちし姉妹、
み空の花を星といひ、
わが世の星を花といふ。

み空の花
わが世の星

かれとこれとに隔たれど、
にほひは同じ星と花、
ゑみと光を宵々に、
かはすもやさし花と星。

にほひ

されば、あけぼの雲白く、
御空の花のしぼむとき、
見よ白露のひとしづく。
わが世の星に涙あり。

（土井晩翠、天地有情）

二〇　八汐の花

馬返を出づる頃、雨はら〳〵と落ちしが、間もなく止み、青雲綿の如く此處に卷き彼所に舒び、其間より言ふべからざる暖き匂を含める薄き桔梗色の空漏れ

りより峽より折れ岩飛ぶ岩に

來ぬ。

路は深澤の峽に入りて、大谷川の水の美いひ盡し難し。大谷川――川といはんよりは、寧ろ連續せる飛瀑とや云はん。氷を碎き雪を融せる清冷の水、此處に到りてまた故の氷雪と復りつゝ、峽より峽に折れ、岩より岩に飛び、飛躍して下る。その一たび躍りて雪を飛ばすや、飛沫は箇々日光を捉へて金紫の色に輝き、その落ちてまたむら〳〵と湧き上る時、冷艶清美實にいふべからざる綠青色を帶ぶ。此等の色は唯眼見るべくして、心已に思ふべからず。況んや之を狀するを

春空に襯す

や。唯岩上に立つて、空しく水の美を嘆ずるのみ。脚下の水の美なるに見とれて、頭上の山の八汐の盛りを見落すなかれ。

櫻花より濃く薔薇花より薄き紅の花の、若葉の綠に隣り、灰色の枯木に映り、或は春空に襯して峯背に簇立し、或は一樹斜めに巖頭にさしかゝり、蒼勝なるは紅深く、やゝ過ぎたるは紅淺く、山の彼處に此處に照れるを見よ。八汐の美また實に言ひ盡し難し。たまたま男體の巔より降り來る雲の、鵬の如き翼を掩うて山を陟り谷を度る毎に、蔭と光と相追うて走り、彼方

うする

の花は陰に入りてうち煙りたるやうにうすれ、此方の花は一樹鮮やかに日光にさし出ててちら〳〵花唇を動かす。

雲の行くまゝに、山と水と花と、光に入り、陰に入り、笑み、欝し、變化の妙を極む。

（德富健次郎自然と人生）

二二　弦月旗

白河口、相馬口、數度の合戰に、官軍の肝膽をさむからしめたる一隊あり、弦月隊となんよびける。この隊常に弦月の旗をたてたり。故にこの名ありとか。この一節はそを率ゐたりし人の說話にかゝれり。かの旗卷の役は、慶應四年即ち明治元年八月二十日にて、實に奥羽最終の戰爭にてありしなり。

寂として聲なし

こゝにしるしたるは、その三四日前のことどもなり。

敵軍敗ぶれて篠原村に退きぬ。我兵進みて旗卷村を占む。村の中央に寺あり、光妙寺といふ。そを本營と定めぬ。夜にいりて敵の襲ひ來らんをおそれ、日野某を飯尾谷に、佐藤某を磯貝原に、安達某を大瀧坂につかはして、それが備をなさしむ。

夜もふけぬ。數百の軍兵皆ねぶりにつきたらん、營中寂として聲なし。予はひとり燈火をかゝげて、地圖を見居たり。をりしも西の方に筒の音す。庭におりたちてそをきくに、その音いよ〳〵はげしうなりぬ。こは

手兵

いひも終らぬに

大事よと、俄に令を下して軍兵をいましむ。やがて急使あり、あまたの敵兵飯尾谷によせきぬといひしかば、さらに、野口某をしてそを援はしむ。予も手兵三十騎を率ゐて、かなたをさしてすゝむ。時に八月十六日の夜なり。いざよひの月いとあかきに、み空たかく雁さへ鳴きわたる。途にてまた急使にあふ。飯尾谷いよ〳〵危しといひも終らぬに、はや吶喊の聲す。飯尾谷は要害の地なり、そこやぶられてはとおもひしかば、馬にまかせて走りに走る。いまだかしこにいたらざるに、はやうち破られたりとみえて、逃げく

たのみがひなし

死生を極むるところ

るものども數しらず。たのみがひなき味方の軍兵かなと、猶山下道をいそぎしに、後の方に筒の音す。かへり見れば磯貝原のかたなり。その北にあたりてまたはげしき音す。こは大瀧坂なめり。敵ははや三方よりよせきぬ。こゝぞ死生を極むるところと思ひて、自らすゝみ戰はんとせしに、かねて予が隊中の勇者としられし水谷某進み出でていひけるは、「奥羽の諸軍あまたあるなかに、敵のめざすは只わが弦月旗のみ。今夜は力をあつめて攻め來たりしなりとおぼえたり。みだりに進み給はんには、最期をとげさせ給ふこと

必定なり。とゞまらせ給へ。」といふ。予「この地を敵にとられんには、再び回復のほどおぼつかなし。たゞ一討にうち退けん。」といひしに、猶止めてきかず。

とかくするほどに、敵軍前後にせまりきぬ。彼「事せまりぬ。弦月の御旗を給へ。大將に代りて討死につかまつらん。」といふ。予とゞめ難きを知りしかば、そを許しぬ。彼旗を馬上にかゝげ、敵軍目がけて躍り入る。他の諸騎またその後に從ふ。

予は間道をたどりて辛うじて松ヶ崎村に出でぬ。此村は飯尾谷、磯貝原、大瀧坂の通路なり。かつ旗卷の本

照る月影にすかし見る

營を去ることほど遠からねば、しばしこゝにて憩ひてありしに、飯尾谷はさらなり、磯貝原、大瀧坂、いづれも皆やぶられ、味方の軍兵おひ〳〵ににげ迷ひきぬ。一騎あり、太刀ぬきかざしこなたをさして來たる。「たれなるか。」ととひしに、その答はせで、「こゝは敵の陣なるか。はた味方の陣なるか。」ととひかへしぬ。「味方の陣なり。」と答ふ。「大將にはいづこにかおはする。」といふもなにとなう苦しげなり。照る月かげにすかし見れば、まがふ方なき水谷なりけり。「水谷よな、予はこゝに。」といひしに、例の旗を懐より出して、予に渡しぬ。かくて

夜一夜

手をかなたにうちふるは、早く落ちのびよといふなるべけれど、更にわかず。「水谷、氣をたしかに。」といひしに、齒をくひしばりて馬上よりまろび落ちぬ。猶よくみれば、身にはあまたの手きずを負ひ、鎧の袖も皆あけにそまりたり。息もたえ〳〵なりければ、藥など與へて、本營の方へ送らしむ、予は逃げくる兵を集め、こゝにてせきとめんと、夜一夜それが備をなす。敵遂に進みきたらず。夜もあけぬ。

かの水谷のこと心にかゝりしかば、本營に返りてそをとぶらふ。彼は一間の内にうちうめきてふし居たり。あたりの人々予の來たるよしいひけるに、苦しき身を忘れて起きあがりぬ。「それには及ばず。」といひしに「無念なり。」とてまた倒る。「水谷よ。味方の軍勢大勝利なり。」といひしに、「なに、勝利とな。そはうれし。」といひて、笑をふくみてそのまゝたえたり。

水谷は今年二十歳なり。其父は白川口にて予に代りて討死したり。こたび父の仇を復せんとて、予に從へるなり。さるをまた予のためにはかなき人となれり。この後何をたのみて、弦月の旗をひるがへさん。おもへば百萬の軍兵を失へるよりも猶悲しかりけり。こ

とに故郷には老母ありとか。かゝるさまは夢にも知らであらん。知らざるのみならず、指ををりつゝ凱陣の日をのみ待ちてあらん。かへすゞもあはれなることしてけるかな。さはいへ、今はすべなし。せめては死體を老母のもとへとて、其用意して送り出しぬ。予も四五丁がほど見送りぬ。あはれ千草に置きそふ秋の露、野末にすだく虫の聲々、予が此曉のこゝろを知るやいかに。をりしもまた筒の音す。予は馬に跨りて再び松ヶ崎に向ふ。

（落合直文、近世名家文鈔より）

千草に置きそふ秋の露
野末にすだく蟲の聲々

不具癈疾
屈强の身體
安閑

二三　人間の三種三等

智愚强弱は樣々にして、上智と下愚と、至强と至弱とを比較すれば、同じ人類とは思はれざる程の相違あれども、社會の經濟上より見るときは、概して之を三等に分つ可し。

不具癈疾の者は天然の不幸として之を除き、生來屈强の身體にてありながら、何等の才能もなく、唯安閑として飲食し、甚だしきは放蕩無賴、常に他人の厄介と爲るのみか、動もすれば他を害して自分の慾を逞しうせんとする者あり。此等は最下等の人にして、社

婆婆塞ぎの邪魔者

會全般の爲に謀れば、此種族の者は有害無益、俗に謂ふ婆婆塞ぎの邪魔者なれば、一人にても其數の減ずること目出度けれ。

一段を上りて、さまで人の世話にもならず、父母妻子と共に衣食するのみにして、曾て戸外の事に關せず、間接にも直接にも、人に教へたることなく、又相談に與りたることもなく、一年に得たるものは一年に衣食し盡くして、老後、死後の謀を爲すに遑あらず、一軒の家を天地となして、生れて死するのみ。此種類の人は、一國の良民として決して邪魔者にはあらざれど

世間の累

私

公

も、社會人事の盛衰には關係薄くして、此世にありて大に益するに非ず、無くて大に不自由を覺ゆるに非ず。まづ以て中の種族なり。

それより尚上りて、教育の結果又は天賦の才力を以て活潑に立ち働き、一身一家の獨立既に成りて、世間の累を爲さゞる上に、尚一歩を進めて、他人の相談相手と爲り、又社會の利害を案じ、自ら自身の地位才力を省みて、能く事に當る可きを信じて、或は私に大に商賣工業を企て、或は公に政治上に關係し、或は地方の民利を謀り、或は宗教教育の先導者と爲る等、一身

居家處世

の働を二分して、一は以て家に居り、一は以て世に處し、公私兩樣の爲に力を盡くす者、之を最上等とす。

以上三種三等の區別は、必ずしも其人の貧富貴賤のみによらず、時に或は富貴にして厄介者あり、貧賤にして重寶なる人物あり、之を筆に記するは難きことなれども、事實は明白にして、世人の常に知る所なり。例へば一町村、一郡、一縣に人の死亡することあらんに、之を傳聞して其不幸を悲しむは人情の常なれども、之を悲しむと同時に、又竊に私語し、「何某の病死誠に氣の毒なれども、實は地方遠近の爲に好き厄介拂

口の端に上る

なり。彼の親類、身寄にてもまづ〳〵安心ならん。」などと云はるゝ者は下等なり。病死の報知に接して、會葬はしたれども、不幸の沙汰は其日限りにして、翌日より語る者もなきは中等の人物なり。死亡の新聞に驚くは勿論、病中より樣々の噂にて心配の折柄、いよ〳〵不幸を聞きて、其地の人々まづ之を悲しみ、次で之を惜しみ、「此人に去られては」云々とて泣く者あり、狼狽する者あり。數年の久しき尙人の口の端に殘りて消滅せざる者は上等なり。

されば今人が偶然にも此世に生れ出でて、其一身の

行狀より、家居處世の法に至るまでも、上等にするか中等にするか、はた下等に陷るか、其上中下の差別は、必ずしも學者先生に質問するを要せず、近く地方人心の向背を視察して之を知るべし。「社會は良師なり。」といふ。即ちこの事なるべし。

（福澤諭吉「福翁百話」）

「社會は良師なり」

二四　福澤諭吉

紹介者

明治維新後の社會に大なる影響を與へたるは西洋思想の輸入なり。而して其西洋思想の紹介者として最も名あるは福澤諭吉なり。

諭吉は豐前の國中津の藩士なり。三歲の時父を失ひしかば、母の手一つに育てられしが、十四歲の時より漢學を學び、二十一歲の時長崎に行きて、和蘭語を學びたり。翌年大阪に出で、緒方洪庵に就きて又之を學び、安政五年始めて江戸に出で、鐵砲洲の藩邸に塾を開きて、藩の子弟に和蘭語を教授せり。

諭吉の江戸に出でたる翌年は、江戸幕府が諸國と條約を結びたる時なり。諭吉ある日横濱に遊びて英吉利人の店に到り、言語の更に通ぜざりしより、大に奮發し、又英吉利語の世界の言語中最も廣く行はるゝ

使節

ことを聞きしかば、これより和蘭語をすてゝ、專ら英吉利語を研究せり。

是より先、幕府は和蘭より一の戰艦を購ひしが、萬延元年春之を亞米利加に遣はさんとす。諭吉請うて其一行に加はり、彼地に渡りて始めて文明國の實況を視察したり。歸國後幕府の外國方に擧げられぬ。

文久二年幕府使節を歐羅巴に遣はす。諭吉も命ぜられて行を共にし、佛蘭西、英吉利、和蘭、獨逸、露西亞、葡萄牙などの諸國を巡視せり。諭吉が後年著したる「西洋事情」といふ書は、此時巡視して得たる知識によること多し。

事ありて

其後慶應三年、幕府は事ありて使節を亞米利加に遣はしたりしが、諭吉はまた同行したり。歸國後、芝新錢座といふ所に一の私塾を新築して鐵砲洲の塾をこゝに移し、又廣く塾生を募集せり。かくて熱心に之を教授し、かの戊辰の役、東京市中の混亂を極めたる時にても、授業平生に異なることなかりきとぞ。

其私塾は後三田に移したりしが、兵亂漸くをさまれる時なりしかば、學に志すもの爭うてこゝに來集せり。諭吉の之を教育するや、すべて英吉利語の書を用

獨立自尊

通俗

ゐて、務めて日新の知識を與へ、獨立自尊を主義として、國家有用の材を養成せり。

諭吉はかく塾生を養成せるのみならず、又大に書を著して、或は西洋の事情を述べ、或は外國の地理を教へ、或は理科の知識を與へ、男女の教訓を說きなどして、普く國民を導きたり。而して其文章はむつかしき漢語古語を避けて、多く平易なる言語を使用し、つとめて通俗を旨としたるものなれば、人能く之を了解することを得て、その著書ひろく行はれたり。

明治三十三年五月天皇陛下其功績を賞して、金五萬圓を下したまへり。翌年二月六十八歳にて死せり。

（文部省、國定、讀本）

二五　淺間山に登る記

四面また人籟なし

淺間山頂に日出を看んとて、夜十時導者をやとひ、友の鯉洋、同宿の學生と共に、輕井澤の宿を出づ。墨を流せる空に、電光をり〳〵きらめき、風すゝきに聲して、冷氣面をはらへり。沓掛より右折すれば、足先やうやく仰ぐ。輕井澤は早や離山にへだゝりて四面また人籟なく、追分の燈火も山外にしづみぬ。電光收り陰雲

とけゆきて、星辰漸くおほし。

仰げば淺間山我頭を壓して聳え、噴烟天にたなびきて、巨人の息するが如し。山阪をのぼりのぼりて、小淺間のふもとにいたりしに、導者路を失ひ、荊棘をひらき、蟲の聲をふみてゆく。枝しば〳〵帽を奪ひ、白露股をうるほす。時計を見れば十一時なり。時早きに過ぐ。風寒き山頂よりもこゝにやすまんとて、木のやゝすきたる處に草をはらひてすわる。山氣肌にしみて、寒さ堪ふべからず。木の枝ををり來り、堆くつみかさねて火をつけんとするに、露にうるほひたる生木、とみには燃えんともせざりしが、辛うじて火うつり、はては火焰數尺の上にのぼり、火粉天に朝し、十歩の間夜色をやぶりて鬚眉明らかなるに、たゞの雜草と思ひしあたりの草も、よく見れば女郎花のなよやかなるがたてる側には、桔梗のやさしきがかしらを傾け、薄も穗にいでて、火勢より起れる風になびけり。

空は霽れつくして星斗手づから捫しつべし。四山ねむりて火ひとり聲をなす。四人火を圍みて暖をとり、導者を相手に雜談しながら、握飯をくらひなどす。このあたりに野獸は居らぬか。」と問へば、「猿兎などおほ

天に朝す

星斗手づから捫しつべし

山岳呼應

し。鹿もいで、狼もいで、熊もをり〳〵出づ。あるとき狼にあとつけられしが、生きたる心地はせざりき。されど十歩よりは近づかず。われとゞまれば狼もとゞまり、われ走れば狼もまた走り、ひとへに我を守るものの如くなりしが、山を出づるとき、ひと聲高く鳴きて別れゆきぬ。思ふによき狼にて、その一聲は別をつげたるにや。されどそのするどき一聲我耳にとゞろき、山岳呼應せし瞬時は、氣ぬけ、魂うばはれて、幾ん弦ど起つこと能はざりき。」など語るほどに、一痕下弦の月、さびしげに東山の上にいでぬ。

山氣空を掠む
草露玉を綴る

たける火の暖さに眠を催して、鯉洋まづ草上に仰臥す。幾莖の女郎花彼が肥えたるからだにしかれ、花だけは殘りて腰のあたりなどにまつはれるもあはれなり。導者もまた眠りぬ。われ學生なる人と相對して語なし。夜はます〳〵ふけぬ。山氣空をかすめて月やうやく高く、冷光地にしきて草露みな玉を綴れり。かるほどに火勢減じければ、火に添へんとて起ちて枝を折る。その音に鯉洋まづさめて起つ。又一枝を折りしに、思ひしよりももろかりしかば、力あまりて導者の上に倒る。導者驚いて起つ。時は一時を過ぎたり。

魚貫

寒戰

火は露にまかせて、また程に上りぬ。

小淺間のふもとを過ぎて、淺間山をよぢのぼれば、一山また樹木なく、路は小石の散布せる上を、殆ど直上す。月はあれども、路はくらし。導者の提燈をさきだて魚貫してのぼる。この山けはしとにはあらねど、路の曲折すくなければ歩行いとかたし。

數歩のぼれば喉かわき、汗いづ。休めば汗忽ち收り、寒氣肌に透り、袷羽織著たる身も尙寒戰す。またのぼれば直に熱す。一寒一熱のぼるも苦しく、休むも苦し。小淺間すでに脚底に落ちたれど、淺間のいたゞきは尙

天外に在り

天外に在り。

一行四人時には相近づき、時には相遠ざかる。さまでへだたらぬ導者の提燈の光なきまでにかすめるは、雲のおかせるにや。霽れし空模様かはりて、雲しきりに動き、片月弧にしてあたりはほのぐらし。いよ〳〵のぼれば風いよ〳〵あらく、寒さも加はりて汗はまたいでず。たゞ喘ぐ聲のみ高うなりぬ。かくて路右に曲りて急ならざるかと思へば、足下は一落して、そのつくる處を見ざるに、風は上より吹きおろして、からだやゝもすれば倒れんとす。危きこと言はんかたな

し。月の忽ち暗くなれるに、顧みれば、大鵬翼を張りて、近く我を搏たんとするが如きに、おどろきて諦視すれば一帶の黑雲なり。われと相距ること二三丈に過ぎず。われと共に山にのぼらんとすれど、吹き下す風の強きがために、のぼり得ず。風とたゝかひて空に動搖す。われいよ〳〵のぼれば怪雲は遂に脚底におちぬ。

諦視

脚底に落つ

風の稍、硫黃の氣を帶びそめたるに、山頂の噴火口も最早遠からじと思ふほどに、やがて瀰漫たる白雲山を壓して下に走る。身その雲中に入れば、硫黃鼻を衝いて殆ど呼吸しがたし。これまことの雲にはあらで、天風の噴烟を捲きおろせるなり。路は東より上り、風は西より吹く。噴烟いよ〳〵濃く。息もとまらんばかりなるに、衆むせびいりて、辟易して歩をかへさんとしたれど、こゝにて下らむも殘りおほしとて勇を鼓してのぼる。手巾にて鼻と口とを掩へど、砂灰なほ口中に入りて、嗽々として聲あり。烟の勢強き時は地に伏して之を避け、やゝうすらぐをまちてたちてゆく。さながら駱駝の背に沙漠を通る旅人の風にあひたるがごとし。

歩をかへす

嗽々として聲あり

奈落

一起一伏、辛うじて頂上に近づけば、路のかたはらに幾多の小孔ありて烟をはく。試に其の口に手をふるれば微溫あり。かくて遂に頂の噴火口に達し、路を左にとれば、風の衝をさけて噴烟また人を襲はず。右は噴火口にして、一面に烟音せずしてのぼり、その深さを知らず。一たび足をあやまらば奈落に轉落すべく、左は山壁深く陷りて白雲みちたり。眼界は左右前後數歩のうちに限らる。右は烟、左は雲、雲といふももと水蒸氣の凝れる所、火山の烟といふもまことの烟にはあらで、地下より噴き出す水蒸氣なれば、その色白雲に異ならず。唯琉氣の有無によりて之を分つ。われら雲烟の中を行くに、路時にさけてその底を見ず。人は脆き石塊をふみて過ぐるなど、いとものすごし。はじめ噴火口を一周せんと思ひたれど、何の眺もなき雲烟の中を行かんも趣なければとて、足をかへす。雲烟の中もさすがに明らかになりたるは、夜の全く明けはなれたるにや。一呼して噴烟の散布せる舊路を取りて下れば、日は既に東山のいたゞきに高し。

（大町桂月）

二六　英國富强の原因

獨占

英國が今日の如き富强國となりたるは、商業の進歩による事にて、商業の進歩せし原因はもとより種々あるべしと雖も、其重なるものは、地理上の便宜と國民の氣力との二つにあり。

英國は四面皆海の島國にして、海岸には到る處良き港多く、舟楫の便利極めてよろしく、貿易の爲海外へ乘出すには最も都合よき國なり。佛蘭西、獨逸なども海には面すれども、英吉利の地勢よきには及ばず。以太利は半島にて、地理上の便益恰も英國の如くなりしが爲、一時は地中海の商業獨占の有樣なりしが、其

比肩すべくもあらず　優勢　事とも思はぬ　得意先

後國民の氣力衰へたるがため、國運も次第に衰へ、今日にては到底英吉利と比肩すべくもあらず。これに由りて之を觀るに、國家の富强は國民の氣力による事にて、單に、地形上の優勢を以て安心すべからざる事愈、明らかなり。

英人は海國の民として、舟乘に慣れて、海波を恐れず、遠征、航海に立出づる事を事とも思はぬ氣象あり。早くより船に乘りて遠洋交通の道を開き、商業の區域を廣めたるが故、今日にては、領土も廣く、商品の得意先も全世界に擴がり居るなり。

誇稱

わが日本國も島國にて、地勢は英國と同樣なれば、これより國民一同の大奮發にて、英國の富强に追附くといふ決心なかるべからず。英人は全世界に領土ある故、常に日沒せざる國と誇稱せり。今や東洋の日出國と西洋の日不沒國と同盟を取結びたるも、何かの因緣といふべく、兩國提携して、我國民も平和の戰爭即ち商業の上に大功業を立つるの覺悟なかるべからず。

二七　外國語を知るの必要

世界的國民
進取的

拜啓。世界的國民として、一歩を海の外に踏み出だすには、大膽に、勇敢に、飽くまでも進取的ならざるべからざることは申すまでも無きことに候。然らば則ち、如何にして善く大膽なるべきか、如何にして善く勇敢なるべきか、如何にして善く進取的なるべきかと云ふに、外國語を知るは、即ちこれが一手段たるべしと存じ候。

蜜の甘きは亞米利加人にも甘く、亞弗利加の黑人にも甘し。胡椒の辛きは英吉利人にも辛く、臺灣の生蕃にも辛し。人情は何處に行きても案外に同じものに

人鬼

て、冷酷なる人は鄰家にもあれば、外國に行きても、人鬼ばかりあるにあらず。賤が伏屋にも月がさし、茨の木にも花が咲くが世の常に候。況して文明諸國民の間においてをや。五洲を驅け歩けばとて何の恐るべきこともこれあるまじく候。但その溫き情思を汲み、心易き交際を訂し能はざるは、彼我の言語を明解せず、彼我の意志に疏通せざる所あるがためにして、遂には人の國外に出掛くることを何となく遲疑せしむる次第にこれあり候。

疏通

遲疑

されば外國語を知るは、人を大膽ならしむる始にして、彼我の情思も通じ、彼我の心狀もわかり候より、そぞろに人の外出心を刺衝して、何となく行きて見たく思はしめ候ものに御座候。國民が世界を股にかけて、地球を狹しとする勇氣は、實にこの外出心に根ざすによること多く候。外國語は世界的國民として立つものの爲に、第一に必要なることは、これにても明かなるべく候。

世界を股にかける

然らば則ち、如何なる外國語が最も急に必要なるべきか。そは言ふまでもなく英語なるべく候。船の到る處として英語國民の居らざるなく、英語の通ぜざる

所は無く候。商賣上、交際上、學問上、最も關係深きは、英語國民たる英米人に候。且つや、わが四隣は過半英語國にして、太平洋の東對岸たる合衆國然り、加那陀然り、布哇然り、南對岸たる濠洲も亦然り。而して西は、支那海の對岸たる香港も同じく然り。加之、今は比律賓群島の如きさへ英語國民の管轄に候はずや。故に外國語として第一に必要なるは英語なるべく候。又歐洲大陸に行くには佛語必要にして、學問には獨逸語が必要なるべく、商用語としては、南洋に向ひ、南米に向ふため西班牙語亦一大必要にこれあるべく候。然れども更に必要なるは支那語、朝鮮語、殊に露西亞語にこれあり候。朝鮮支那は邦人第二の本國たるべき所に候へば、言語互に通ぜずしては叶はず候へども、これは先づ筆談を以て通ずる利なきにしもあらず候。但亞細亞露西亞、殊に西伯利亞の地方に至つては、後來我が商業貿易の一大市場となるべき所にして、又ならしめざるべからざる所にこれあり、これが言語を解するは極めて必要なることに御座候。

いせずしては叶はず

かく各の志す所向ふ所に依り、學習すべき外國語は固より一にあらざるべしと雖も、兎まれ角まれ、世界

兎まれ角まれ

的國民たる資格を作るに最も急要なるは、即ち外國語を知る事に御座候。敬具。

（塚越芳太郎）

二八　英人は如何なる國民か

常識　自信　性格　華客

我同盟國なる英吉利人は如何なる國民か。

英國は商工業を以て國を立て、國民は勤勉にして常識に富み、自信の念極めて厚し。英國の名譽と權力とは世界無比なりとの信念を有するは、英人を通じての性格とす。英國の國旗の五大洋に飜らざるなく、商業の華客の五大洲に存在せざるなく、世界各國語の

怪しむに足らず　あいそ　興行物

中にて、英吉利語の普及最も盛なるをおもへば、其自信の厚きも亦怪しむに足らず。

英人の家庭は健全なり。一家團欒、ローストビーフ、プッヂングを味ふ時は、蓋し英人の最も得意なる時なるべし。主婦の賓客を待遇するも亦懇切にしてあいそよし。日曜日には一家相率ゐて寺院に赴く。この日は寄席、芝居等一切の興行物休止せられ、汽車の如きも、若しくは全く發車せず、若しくは發車の回數を減ず。これ歐羅巴の他の國々に於ては見る能はざるところなり。而して普通の週日に於ては、一層の勤勉を

以て職務に從事す。

工場は到る處に多く、全國幾多の都市にては、煙突林立、高く天を焦せり。故に其商品は全地球に輸出せられ、我日本國にも年々約二千萬圓の輸入あり。一方に於て、かく勤勉にして蓄財の道に長ずといへども、一方に於ては、亦慈善布教の事業に熱中す。

一方に於ては

熱中す

商工業の進歩かくの如くなるより、貧富の差別甚だしく、到る處無數の貧民あり。リバアプール、マンチエスター、ロンドン等大都會貧民窟の愍れむべき狀態は、到底日本人の想像し得べき所にあらず。

貧民窟

英人の賭博を好むこと、亦歐米人中其比を見ず。如何なる場合にも好んで金錢を賭す。人あり水に溺れんとすれば、一人は必ず之を救はんとて水中に躍り入るなり。然れども他の百人は、溺るゝか否かについて賭博を試るなり。故に競漕、競馬等の遊戯は到る處盛に行はれ、富者は之に向つて多額の金錢を賭するを樂とす。

保守的

英人の氣質は概して保守的にして、憂鬱に陷り易く、衣食に何不自由なき人の、自殺を試るが如きこと尠からず。

一技一藝
放埒
放心

二九　兒童に訓す

精深微妙の眞理を究むる高尚なる學問は言ふまでもなし。僅に一技一藝の上手と言はれんだにも、その心を潛めず、放埒に明かし暮らしては、事の成らんことおぼつかなし。苟も師父の教を受け先輩の講說を聞く時に當りては、最もその放心を收めんこと肝要なるべし。若し空を渡る鴻鵠に心を馳せ、門を過ぐる車馬に目を奪はれなば、心ここにあらずして視れども見えず、聽けども聞こえざるべし、いかで學業の成

反省

るを望まん。何事も古人を學ぶといふは僻說なるべけれども、その善きものは擇びて師とすべし。今古人勉學の一端を擧げて反省の助となさん。

戰國の頃、山本勘助晴幸とて、甲斐の武田の臣にて軍略世にすぐれたる人ありき。嘗て衆人の中にて軍事の物語しけるに、その席に小宮山助太郎、小山田八彌、秋山友市といふ三人の小兒ありき。小宮山はうづくまりて謹聽し、八彌は笑語し、友市は度々座を立ちぬ。勘助人に語りて曰はく、「助太郎は必ず事を濟すものならん。二人は必ず必ず用には立つまじきものなり。

勘當

方々よくその行末を檢せられよ。」といひしが、後に武田氏衰へて勝頼天目山に敗北せし時、果して二人は出奔し、助太郎は君の勘當蒙り居たりしかども遂に殉死せり。世に小宮山内膳友信といひしはこの助太郎が後の名なりとぞ。

又天和の頃、北村季吟は歌連歌の上手にて、後に幕府に召し出だされ、和學方となりて新に家を興しゝ近代の文學家なり。この人初め花の下の宗匠となり、聖靈會の百韻しける席に、その子湖春、十四五歳ばかりなるが侍りけるに、つと立ちて厠に行かんとせり。季

中座
堪能

吟怒りて、「やよ悴、汝連歌に身を入れて居垂れにしたりと人に言はれんは、道に於て耻にあらず。かゝる席にて中座せんとは、いみじきうつけ者ぞ。」といたく誡めけりといへり。

いづれもその學に心を入れて他事なきことかくの如くならざれば、世に勝れたる堪能にはなり難きを誡めたるなり。汝等苟も名を成さんと思はゞ、こゝに深く思を致すべきものぞ。伊藤東涯先生が「道を學ぶものは孤軍大敵に臨み單身重圍に陷りしが如く、一尺を進むとも一寸を退くことなかれ。」といはれしは、

思慮ある言

實に思慮ある言といふべし。

（萩野由之、國文より）

三〇　豐太閤

文字なき社會

武邊

從來、豐太閤の人物事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記、繪本太閤記の類の書なり、三國志、漢楚軍談などと共に、普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、亦講談師の種本ともなりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに、惜いかな、此等の書には、武邊の偉人としての太閤は稍、描き出されたれども、其他の側面は、殆ど全く忘却せられたる如く、まゝ又い

流布

祐筆

みじき誤謬をさへ流布したり。太閤が無學文盲の人と傳へられたるが如き、其最も著しき例證なるべし。磨けばますゝ光り、鑽れればいよゝ堅し。」といへる如く、眞の偉大なる人物は仔細に研究せらるゝに從ひて、一層其光彩を發揚するを見る。予は今、太閤が一面にては雄才大略の人なりしと同時に、一面には決して無學文盲にあらざりしを斷言し得るを喜ぶ。抑太閤は一代の事蹟多く、事業の規模大なり。故に舊大名たりし華族の諸家、古社寺、舊家等に、太閤の文書を傳へらるゝもの、其幾千なるを知らず。公の祐筆たり

生氣鬱勃

清婉秀潤

し太田和泉守牛一、大村法橋由巳等の文章家の手に成りたりと思しき雄健にして生氣鬱勃たる文書其大部分を占めたりとはいへ、確に太閤の自筆なる色紙、短冊、消息類も亦少しとせず。西に東に遠征せる先より、母なる大政所、夫人なる淺野氏、さては側室淺井氏若しくは秀頼に贈りたる書狀の如きは、親子夫婦の間柄の事なれば、もとより祐筆に託すべくもあらず。皆自ら筆を執りたりしなり。

用ゐられたる文字は大抵平假名なり。書體及び筆力に清婉秀潤等の贊美の辭を加ふることこそ敢てす

峻拔

無下

咄嗟章を成す

る能はざれ、頗る圓熟したるものにして、その中自ら峻拔の氣象のあらはるゝを見る。漢字もまた用ゐられたるが、其崩し方も無下に卑しからず。嘗て習字せしことの無き人には決して能くし得るところに非ざるなり。江村專齋の「老人雜話」に、太閤は、祐筆が醍醐の醍の字を忘れて、頓には思ひ出でざりしを、大の字を書けよといひし談を記せるは、太閤の簡易を喜び、敏捷を尙びしをいへるにて、少しも漢字を知らざりしといへるには非ず。

軍陣にての消息などは、咄嗟に文章を成したるにて、

趣味津々

千言萬句を費す

字句の鍛錬なしといへども、天眞爛漫、辭簡にして意達し、少しも凝滯する所なし。而して、その間に溢るゝばかりの愛情あらはれ、趣味の津々たるものあるを覺ゆ。天正十八年小田原在陣の中に、母なる大政所へ上りし書中に、「そもじさま御ゆさん候て、きをもなぐさみ、わかく御なり候て可給候。たのみ申候。」の語あり。千言萬句を費すとも、子の親に對する愛情は此の「若くなり給はれ」の一語より適切なるものはあらじ。又その政所淺野氏への書中には、「ねんごろに文給はり、御けんざんのこゝろしてねんごろにみる。」ことし

撥亂反正

内にはひまあけ可參候。心やすく候べく候。かならずとし内に參候て御目にかゝり、つもる御物がたり可申候。せつかく御まち候べく候。」等の句あるなり。祐筆の手に成りたる文書中にも、かしこゝに太閤の口授にかゝれりと思はるゝところあり。固より千軍萬馬の血腥き中に成長したる人の習ひなれば、太閤も多少殺伐粗暴の氣風ありしを免れず。然り撥亂反正の功を奏するには、多少かゝる氣風の必要もありしなるべし。しかも多少の古文書の上より觀察するときは、太閤は亦母に孝にして、妻子に愛あり、將卒に對

しては最も慈悲の念に富みたる善良の紳士なりしを見る。

さて太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十八日太閤禁中に伺候しけるに、九重の櫻花今を盛りと咲き亂れたるを賞でて、其下に低徊せり。後陽成帝遙に之を覽そなはしてにや、畏くも勅使を遣し、花の折枝に一首の御詠を添へて下し賜ひしかば、太閤感謝に堪へず、すなはち、

忍びつゝ霞とともにながめしも
あらはれけりな花の木のもと

と返歌を上られき。又十六年の事なりけり、北山に狩して龍安寺に憩へる事ありき。頃しも春の最中なりけるに、庭前の垂絲櫻未だ綻(ナコヤ)びず、却りて淡雪のちらちらと降り來りしかば、太閤おもしろく思ひて、

時ならぬさくらの枝にふる雪は
花をおそしとさそひ來ぬらん

と詠まれき。感興想ふべし。文祿三年諸大名を率ゐて吉野の花見を催されしとき、關屋の花のもとにては、

吉野山たれとむるとはなけれども
今宵も花のかげにやどらん

と吟じ、藏王堂にては、

歸らじとおもふ家路を入あひの
かねこそ花の恨なりけれ

と歌はれたり。巧を弄ばずしてなか〳〵に雅趣に富み、格調も亦平凡ならずして、古の撰集中にも置きたき心地せらる。此他、紀州征伐のときには和歌浦、玉津島にて、小田原陣のをりには清見潟にて、征韓の役には肥前の名護屋などにての詠歌も少からず。天正十六年の聚樂第への行幸のときは勿論、醍醐の花に、大佛の月に、その折々の歌多く、時としては大宮人の昔

巧を弄ばず
格調平凡ならず

横槊賦詩（オーサクフシ）
陣中ノ詩

を忍ばしめ、又、時としては古英雄の横槊賦詩の面影を想はしむ。而して功成り名遂げたる此千古の偉人にも亦無常を感じたる事のありてや、

露とちり雫ときゆる世の中に
何とのこれる心なるらん

と嘆きしこともありしが、慶長三年八月薨去せらるるや、哀れにも、

露とおきつゆと消えにし我が身かな
なにはのことは夢のまたゆめ

といふ辭世の短册をとゞめられき。げに太閤は伊達

錚々たるもの

政宗、細川忠興等と同じく、其頃の武人にして文藻ありしうちの錚々たる者なりしなり。

確に太閤の自筆と認めらるゝ消息若しくは短册にして、予が原本を目擊したるものゝみにても、二三十はあるならん。しかのみならず、太閤は、時には學者をして往事を談ぜしめて之を聽き、亦禪學の書の講義をも聽きしなり。我國人が誇るに足るべき此大偉人は、決して無學文盲ならざりしなり。

（三上參次）

再訂 明治讀本 卷三 終

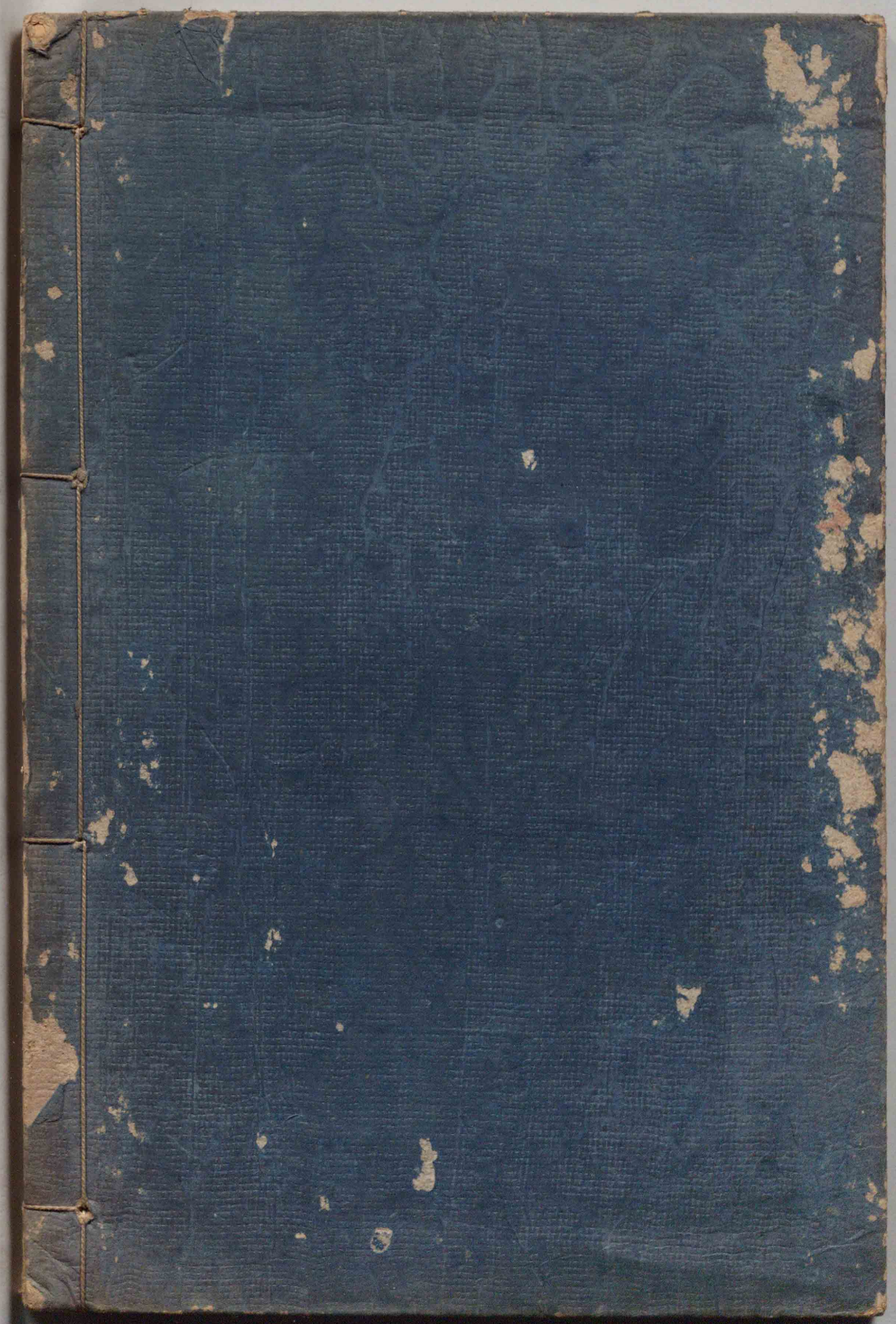
明治三十年十一月十五日印發
明治三十年十一月十二日再訂正發行
明治三十年二月三日再訂正印刷
明治三十年二月十五日再訂正再版發行
明治三十年二月十九日再訂正再版印刷
明治三十年十一月十八日再訂正再版發行
明治三十年十一月十九日再訂正再版印刷
明治三十年十二月十日再訂四版印刷
明治三十年十二月十七日再訂四版發行

著作者　芳賀矢一

著作權所有

發行兼印刷者　東京市神田區裏神保町九番地　坂本嘉治馬

發行所　東京市神田區裏神保町（電話本局一〇三六番）
販賣所　東京市神田區南乘物町（電話本局八九二番）（電話本局一六四番）
合資會社　冨山房
明治圖書株式會社
振替貯金口座四九一五番

再訂明治讀本奥附
定價　全十册　各金貳拾五錢

印刷所　日清印刷株式會社